

澄円『浄土十勝論』書下し——(跋文)

室町期における諸宗兼学仏教研究会

はじめに

本研究会では、室町期の仏教研究において従来あまり注目されていない諸宗兼学・融合思想を有した仏教者旭蓮社澄円(一二九〇—一三七二)に着目し、著書『浄土十勝箋節論』(以下、『浄土十勝論』)十五卷ならびに『同輔助義』四卷を取りあげて、浄土学・真言学の研究者を中心に研究を行っている。

具体的には、これまで一度も活字化されていない『浄土十勝論』『同輔助義』について、嘉永五年刊本へ文久四年再版本を底本とし、翻刻・書き下し文・語注の作成を中心に行っている。また、澄円とその著作に関する個人研究を翻刻作業等と並行して行っている。

今年度の共同研究については、卷中乾上の書き下し及び出典注の作業を行った。次年度も引き続き書き下しならびに出典注をほどこす作業を行う予定である。また、個人研究も計画的に進めていきたいと考えている。

凡例

一、本編は『浄土十勝論』の嘉永五年刊本（文久四年再版）を底本として、書き下し・出典注を施したものである。

一、書き下しに際し、字体は原則通用漢字に改めた。

一、書き下すにあたり、底本で判読できない箇所については、大正大学所蔵・寛文三年刊本（寛文本）を参照した。

一、原則、底本の返り点・送り仮名に依る。但し、底本の返点・送り仮名が明らかに適当でないと考えられる場合は、校合本に従った。

一、難読語には振仮名にて読み方を記す。

一、難解語及び解説が必要と考えられる語句には脚注にて解説を付した。

一、適宜改行を施した。

一、適宜句読点中黒点を付す。

一、使用する括弧類に関しては左記の通り。

「」…引用文
『』…典籍名
～…割注
【】…研究会補足

一、引用文は脚注にて出典を示した。引用文中の引用文についてはその限りではない。

◎書名の略称は左記の通り。

・『大正新修大藏経』…正蔵
・『続大正新修大藏経』…続蔵
・『卍字蔵経』…卍蔵
・『卍字続蔵経』…卍続蔵
・『大日本仏教全書』…日仏全
・『浄土宗全書』…浄全
・『続浄土宗全書』…続浄
・『大正大学総合佛教研究所年報』…綜佛年報
・石井教道編『昭和浄土宗全書』…昭法全

浄土十勝論首卷

目録

論主の真影

勅詔

贊文

論主の伝記

論主著述書目

序文三篇

跋文十九章

凡例

論文総章目

澄円菩薩真影

〔図〕

(1) 勅：天皇の命令。また、それを伝える文書。

臨時の大事に用いる詔に対して、通常の小事を伝えるときに使う。

(2) 紫賜：天皇の許可をえて紫衣や香衣を着けること。浄土宗では澄円が最初といわれる。

(3) 宣：勅旨を宣すること。宣旨。

勅⁽¹⁾して永⁽²⁾しえに宣⁽³⁾す。紫を賜い、円頓大乘成論師澄円菩薩を賜う。

宜しく宝祚⁽⁴⁾延長国家安全を祈禱すべし。
てへれば、依て天気⁽⁶⁾執達⁽⁷⁾件の如し。

康永元年⁽⁸⁾四月七日

十勝論刻成り、随喜⁽⁹⁾に勝えず。

謹んで臨ず。旧朝勅牒⁽¹⁰⁾、之れを卷首⁽¹¹⁾に冠す。

二品尊趣⁽¹¹⁾

(浄土門主) (尊超親王之章)

澄円菩薩の賛 (大光普照⁽¹²⁾)

舶を万里に飛ばして廬岳⁽¹³⁾の風を伝へ、

一百十の則は雪冤⁽¹⁴⁾の功を榔⁽¹⁵⁾つ。

縣河⁽¹⁶⁾の弁⁽¹⁶⁾を奮い英気は虹の如く、

(4) 宝祚：天子の位。皇位。

(5) 者：というわけで。以上のような次第で。

「てへり」「てへれば」も漢文体で用いられた「者」の訓読によるもので、「者」が文末に置かれた場合は「てへり」、文頭では「てへれば」とする。

(6) 天気：天皇の機嫌。天皇のおぼしめし。

天機。

(7) 執達：上意を受けて下に通達すること。

(8) 康永元年：一三三二年、北朝光明天皇の在位。

(9) 旧朝勅牒：「泉州堺旭蓮社縁起」(『本朝廬

山旭蓮社』所収)によれば、旧朝とは光明天皇の朝廷。牒とは役所の公文書。

(10) 二品：律令制で、親王の位階の第二位。

(11) 尊超：享和二年(一八〇二)―嘉永五年(一八五二)。知恩院門跡六世。有栖川宮織仁親王第八王子として生まれ、將軍家斉の猶子、光格天皇の養子となる。文化二年(一八〇五)、四歳で知恩院宮を相続した。

(12) 大光普照：教音の遊印。『無量寿經』末尾に「大光普照十方国土」(正蔵一・二・二七九上/浄全一・三六)とある。

(13) 廬岳：廬山のこと。廬山は中国江西省北部の名山。周代から靈山として知られ、四世紀末に慧遠が東林寺において白蓮社と称する念佛道場を開き、中国浄土教の源流となった。

(14) 一百十則：本書『浄土十勝箋節論』一四巻を構成する十科百十編のこと。

(15) 雪冤：無実の罪をそぐこと。ここでは、他宗からの論難に反駁して浄土宗の面目を保つことをさす。

(16) 懸河弁：流暢な弁舌。

康永の綸綍、徳は宸衷に感ず。

叢林の竜象、独り此の翁有り、

蓮社を恢復して扶桑の遠公たり。

文久甲子孟春

大僧正教音敬贊（大僧正）（教音）

旭蓮社主澄円菩薩伝

釈智演、姓は源氏、泉州大鳥の人なり。父は其の国の刺史、義貞なり。則ち源義氏の玄裔なり。母は百濟氏。壯齡に泊びて世子無し。母氏、之れを憂いて常に家原の文殊師利に精祈す。

- (17) 康永綸綍：永康元年（二三四）光明天皇（北朝）によって出された詔勅。澄円が勅により、天変地異や疫病の流行を鎮めたので、大菩薩の号と封戸田二頃を賜り、さらに扶桑廬山の額を賜った。
- (18) 宸衷：天皇のみどころ。聖衷ともいう。
- (19) 叢林：寺院のこと、僧林ともいう。
- (20) 竜象：すぐれた知力・行動力を合わせ備

- (21) 恢復：回復。
- (22) 扶桑：日本のこと、中国から見て東方にある国という意。
- (23) 遠公：廬山慧遠のこと。後趙延熙二年（三三四）—東晋義熙十二年（四一六）。中国浄土教の祖師。浄影寺慧遠と区別するため廬山慧遠と称される。白蓮社

といわれる念仏結社を組織し、『般舟三昧経』に基づく念仏の実践を勧めた。

- (24) 文久甲子：文久四年（二八六四）。

- (25) 孟春：陰暦一月の異名。

- (26) 大僧正教音：寛政九年（二七九七）—慶応三年（一八六七）。開蓮社闡教音という。飛騨国（岐阜県）大野郡高山に生まれ、檀林の館林善導寺四一世、新田大光院五九世、鎌倉光明寺九三世を経て、万延元年（一八六〇）増上寺六七世法主大僧正に任ぜられた。
- (27) 智演：澄円の別名。浄円といわれる場合もある。昇蓮社・旭蓮社とも号す。

- (28) 泉州大鳥：和泉国大鳥郡。現在の大阪府の堺市及びその近郊。

- (29) 刺史：『鎮流祖伝』では「刺史」に作る（浄全一七四五二下）。刺史は、もとは古代中国の地方官の名称。「国司」の唐名。

- (30) 玄：「玄」は曾孫の子（玄孫）を指し、「裔」はあとつぎ・末葉・子孫などの意味がある。

- (31) 家原文殊師利：一乘山家原寺。大阪府堺市。高野山真言宗別格本山。開基は行基菩薩、本尊は文殊菩薩。

一 霄闐爾たり。⁽³²⁾ 適々、嬰孺、庭籬の側に啼く。父母、悦びて之れを納めて鞠育す。⁽³⁵⁾ 稟所⁽³⁶⁾の天機、朗然として深く、進止亦た雍閑なり。⁽³⁷⁾

五歳の時、教えざるに自ら文殊の呪を誦す。人皆な之れを駭嘆す。

九齡にして東大寺の円雅法師を頂礼して塵衢を出づ。屢、華嚴・三論・唯識・俱舍の滋味を薰蒸す。⁽⁴²⁾ 天縱にして勞せず。又た槓尾山に躋り、⁽⁴⁴⁾ 兩部の秘奥を究む。承遍・觀豪の二老に参じて

(32) 一霄闐爾：「霄」はそら、天上、あめ等の意。

「闐」は、しずか・ひっそりなど、人けがない様子をあらわす。

(33) 嬰孺：いとけない者。おさなご。

(34) 庭籬：「籬」はまがき。ここでは庭の垣根を指す。

(35) 鞠育：養育すること。

(36) 天機：生まれつき備わっている才能。

(37) 進止亦雍閑：「進止」は立ち居振る舞い、挙動をいう。「雍」はやわらかの意。「閑」

諸宗の教義を学び、それを深く身に染みわたらせたこと。

(43) 天縱：生まれつきの才能。

(44) 槓尾山：槓尾（京都市右京区）は、真言宗

大覚寺をはじめとして古来より真言宗寺院が存在し、密教が伝持されていた。高尾、榎ノ尾とともに三尾と呼ばれた。

また、天台宗寺院である施福寺（大阪府和泉市）も通称「槓尾寺」と呼ばれている。どちらを指しているかは不明。

(45) 承遍：詳細不明。『十勝論』中巻下・巻末

参照。比叡山東谷に住する。関東で九品寺義を学び、その後、比叡山に登り天台宗を学び檀那院流を相伝する。澄円は承遍の室に入って円頓戒を禀承した。また『摩訶止観』等の講義を受ける。

澄円が比叡山に学んでいた頃に入寂し、澄円はその臨終に立会い奇雲・神楽等の奇瑞を見たと伝えられる。

(46) 觀豪：詳細不明。『十勝論』中巻下・巻末

参照。比叡山東谷に住する。澄円の顕密の師範。『浄名疏』等の講義を受ける。澄円が比叡山を去った後に入寂。澄円は人づてに臨終の様子を聞き、無悩にして、尊号をかけ西に向かい入寂したと伝えられる。

はしずかの意がある。ここでは幼い澄円の立ち居振る舞いが落ちて着いている様子をあらわす。

(38) 駭嘆：おどろき感嘆している様子。

(39) 円雅法師：詳細については不明。

(40) 塵衢：「衢」はちまたの意。ここでは世俗を指す。

(41) 滋味・味わいのよいもの、また滋養になるもの。

(42) 薰蒸：いぶし蒸すこと。ここでは澄円が

台数を罄^{つく}す。東福寺⁽⁴⁸⁾に如きて虎関禅師⁽⁴⁹⁾に謁す。関公、仰ぎて威友⁽⁵⁰⁾と為す。京師に出でて小坂⁽⁵¹⁾・九品の流義⁽⁵²⁾を聴く。棄て東城に奔る。照山光明寺⁽⁵³⁾に如きて寂恵⁽⁵⁴⁾・定恵⁽⁵⁵⁾の二傑を礼して、白旗の正流を汲む。自証化他、金戒布薩等の群伝を研窮して、寒暑を歴る。

文保元年⁽⁵⁶⁾、渤海⁽⁵⁷⁾を踰^こゆ。乃ち廬山に登りて優曇普度大師⁽⁵⁸⁾に参じて蓮乗を精窮す。仏図澄⁽⁵⁹⁾、及び遠公の面授口決の正統を伝持し、禅蓮双修の保証^{けんひん}を兼稟^{けんひん}す。

留学五年、飽^みちて靈区^{れいこ}を渉るに頭密等の教を精粹す。

- (47) 罄^{つく}す、みな、ことごとくの意。
(48) 東福寺⁽⁴⁸⁾：慧日山東福寺（京都市東山区。嘉禎二年（一二三二）に創建された臨済宗寺院。
(49) 虎関禅師⁽⁴⁹⁾：虎関師鍊（一七八一—一三四六）。臨済宗の僧。日本最初の仏教史書『元亨釈書』（三〇巻）の著者。
(50) 威友⁽⁵⁰⁾：「威」は「畏」に通ず。「畏友」は尊敬する友人をいう。

- (51) 小坂⁽⁵¹⁾：法然の弟子・証空の流れである西山義を指す。
(52) 九品⁽⁵²⁾：法然の弟子・長西の流れである諸行本願義を指す。

- (53) 照山光明寺⁽⁵³⁾：天照山光明寺（所在地は鎌倉市材木座）。もとは佐介谷にあつて悟真寺といい、正中二年（一三二五）ころに「蓮華寺」と改める。第八世祐崇（一二六一—一五〇九）の代（法灯を継いだのは一四八二年）に「光明寺」と改め、

現在地に移転した。澄円が訪れた当時は未だ「悟真寺」と号していたと考えられる。

- (54) 寂恵⁽⁵⁴⁾：良暁（一二五一—一三二八）。浄土宗第四祖。

- (55) 定恵⁽⁵⁵⁾：良誉定恵（一二九六—一三七〇）。良暁の弟子。光明寺第三世。浄土宗誓号の初例とされる。

- (56) 文保元年⁽⁵⁶⁾：一三二七年。

- (57) 渤海⁽⁵⁷⁾：遼東半島と山東半島とに囲まれた内海のこと。

- (58) 優曇普度大師⁽⁵⁸⁾：一一三三〇。江蘇省丹陽のひと。年少時に廬山・東林寺に入つて出家。邪説に堕ちた白蓮宗の末徒を正すため「廬山蓮宗宝鑑」一〇巻を著し、慧遠以来の念仏の正宗を明らかにした。

- (59) 仏図澄⁽⁵⁹⁾：一二三二—一三四八。西域の人。永嘉四年（三二〇）に洛陽に來たり、大法の宣揚に努める。

元の英宗至治元年⁽⁶⁰⁾、澄三藏将来の舍利、遠公所持の蓮華漏⁽⁶¹⁾、其の外、仏像、経論、諸の道器を携え帰る。則ち本朝元亨元年なり。正中元年⁽⁶²⁾、元応帝、師を詔⁽⁶⁴⁾して旭進社を創⁽⁶⁵⁾め、般舟三昧を修せしむ。

後村上帝、宮に召して蓮教を説かしむ。南北の碩徳、之れを軋⁽⁶⁶⁾。師、慧弁快利にして諸師の弁鋒を折⁽⁶⁶⁾く。帝、倍々崇重して、紫衣及び大経寺の額を賜う。

永康元年⁽⁶⁷⁾、帝、師を召して円頓大戒を稟⁽⁶⁷⁾く。其の年、天変⁽⁶⁸⁾地祲⁽⁶⁸⁾、流疫⁽⁶⁸⁾疱瘡⁽⁶⁸⁾、兆民⁽⁶⁸⁾を悩ます。師に勅して之れを禳⁽⁶⁸⁾わしむ。師、七日別時會を修して、后妃、公卿をして念仏を誦せしむ。災害悉く消熄⁽⁶⁹⁾す。帝、優賞⁽⁶⁹⁾して澄円大菩薩の号、及び封戸⁽⁷⁰⁾田二頃⁽⁷⁰⁾を賜い、重ねて扶桑廬山の額を賜う。世挙げて蓮宗の中興、禅教俱履の精藍⁽⁷¹⁾と曰う。

(60) 元英宗至治元年…一三二二年。本文中記されるように日本の元亨元年に当たる。

おそらくは、「蓮華焔」のことを指すと思われる。

(61) 蓮華漏…『鎮流祖伝』にも「蓮華漏」とある。

(62) 元亨元年…一三三二年。

(63) 正中元年…一三三四年。

(64) 元応帝…後醍醐天皇のこと。

(65) 軋…勢い争うなどの意。ここでは澄円の講説に対し、南都・北嶺の碩徳が反駁したことをあらわす。

(66) 慧弁快利…「慧」は仏の智慧をいい、「弁」は弁舌、「快利」は極めて鋭利なことを指す。

(67) 永康元年…『鎮流祖伝』にも「永康」とあるが、『新撰往生伝』は「康永」となっている。「永康」という年号は日本に存在しないため、康永元年(一三四二)の誤りと考えられる。

(68) 兆民…多くの民。

(69) 優賞…手厚く賞賛すること。

(70) 封戸田二頃…「封戸」は朝廷から賜わった領地をいう。「頃」は中国における面積の単位で一頃は百畝にあたり、日本でいえば一町にあたる。澄円が賜わった土地は、現在の約六千坪に相当する。

(71) 禅教俱履の精藍…旭蓮社のこと。浄土教のみならず、禅宗や天台・華嚴などの教宗をもとに学ぶことのできる精舎のこと。

応安五年七月二十五日、上堂して蓮規を遺誡し、玄黙の空に
沖る。享命九十歳なり。

師の製書、甚だ多し。『松風論』『十勝論』、盛んに世に行う。『驚
覺論』『獅子伏象論』、今、秘笈に在りと云う。

述して曰く、異なるや。師の踐履と為すなり。舂めは叢間に
呱呱たり。其の生、議すべからず。嘍唎の時に覃んで、夙に知、
動揺して自ら陀羅尼を諷す。更に示寂に杳然として天に翀る。
寔に此れ応化の才操にして、而も其の本因を見ざること、遺憾、
遺憾。宜なるかな、元朝の周踐、蓋し隣歩の一遊か。後村上帝
の封詔に曰く、法師、遠く滄波を涉り、異聞を絶城に覆う。遐
かに唐県に遊び、妙機を碩師に研む。宜しく食封百戸を施すべし。
道声、鳳闕に響き、石膏、品物を沢す。其の功、甚しきかな。

(72) 応安五年：一三七二年。

(73) 玄黙沖空：「玄黙」とはもの静かのみだ
りにしやべらないことをいう。「沖」に
は、飛ぶ、高くのぼる、いたるなどの
意があり、ここでは静かな空に往生す

(74) 秘笈：「笈」はおいばこ・ふばこなど、
箱を指す。ここでは澄円の著作のうち
『驚覺論』等が箱などに秘され、世間の
目に触れ得ない状態にあることをあら

る様子をあらわしている。

わす。

(75) 踐履：澄円の足跡を指す。

(76) 呱呱：小児の鳴き声。

(77) 嘍唎：「嘍」はまじないの語であり、「唎」
は小児が泣くの意味がある。おそらくは、
幼児期の軟語を話すことを指すと考え
られる。

(78) 諷：文言をそらんじる意。

(79) 杳然翀天：「杳」は言語が流暢なこと。「翀」
は飛んで天にのぼるの意がある。ここ
では澄円の臨終が何らの障害も無く安
らかにであったことを指すと思われる。

(80) 周踐：元朝をあまねく遊学したこと。

(81) 蓋：「鎮流祖伝」では「著」に作る。

(82) 後村上帝封詔：『新撰往生伝』にも同文
あり（浄全一七・五四三下）。

(83) 鳳闕：宮城の門をいう。転じて朝廷を指
す。

(84) 化普沢品物：「化」は教化を指し、「膏」
はきめが細かいことや滑らかなことを
いう。澄円のすぐれた教化があらゆる
人々をうるおしたことを意味する。

已上の伝は、湖北心阿の撰ずる所の『神土鎮流祖伝』巻第四⁽⁸⁵⁾に載する所を焉に記す。案ずるに旭蓮社所蔵の伝記と広略の異なり有るのみ。蓮社の伝には「一日」と標して示化の日を記せず。相い伝えて享年九十五にして七月二十七日の化なりと云う。又た師蛮⁽⁸⁶⁾は七月十七日と云う。蓋し論主示化の時、隻履⁽⁸⁸⁾を遺せりと。今、蓮社所蔵の真影を摸す故に、隻履なる者、之れに由る。門、謹んで再案するに、凡そ菩薩の降誕示化の紀年月日、暨⁽⁸⁹⁾以び名称等、異説鮮⁽⁹⁰⁾かならず、孰⁽⁹¹⁾か是なることを知らず。其の中、蛮師、以為らく「宋国の人」と。是れ恐らくは然ず。近世、八事山空華和上、且らく『本朝高僧伝』中に就きて不審三条を挙ぐ。其の第一条に謂く「伝に曰く、泉州阿弥陀寺澄円は宋国の人なり」と。今日、此の説、甚だ紕繆⁽⁹²⁾なり。而して自説を挙げて曰く、云云。大いに『鎮流祖伝』と旨を同ず。今、煩わしく記せず。学者、思択せよ。

(85) 『鎮流祖伝』巻第四：浄全一七所収（四五二下～四五三下）。

(86) 師蛮：『本朝高僧伝』の著者。

(87) 『本朝高僧伝』：日仏全（旧版）一〇二・二五八上。

(88) 隻履：沓を片方だけ履くこと。澄円菩薩真影には、左側の沓が描かれていない。達磨大師が片方の草履を携えて西方の国に去った「隻履西帰」という故事になぞらえたものと推察される。

(89) 『本朝高僧伝』：日仏全（旧版）一〇二・二五七下。

(90) 八事山空華和上：諦忍妙龍（一七〇五一～一七八八）、真言宗の学僧。浄土宗白旗派の教学も修めている。尾張興正寺第五世を継ぎ、真言律を顕揚した。

(91) 挙不審三条：諦忍妙龍は、著書『空華談叢』三に『本朝高僧伝』澄円伝についての不審な点を挙げている（日仏全（旧版）一四九・四六八上）。

論主著述書目

驚覚論 浄土五祖弁 同末書

松風論 浄土諸祖系図 同光彩論

二論問答集 二道対弁論 蜀道論

愚問賢答集 二愚一賢集 琢磨鈔

釈門息諍論 知恩報恩集 親近知識集

破邪顕正論 能断金剛集 呂律集

浄土十勝論 同輔助義

浄土諸流縁起集

序文三篇

浄土十勝論序【俊覚律師】

夫れ一切衆生は本有の薩埵なり。無始の色心は遮那の境智なり。然るに忽然念起・下下来来せし自従り之れ以往未だ還同本覚・上上去去の方軌を知らず。爰に弥陀覚王は乃往久遠にして凡夫引接の大願を発し、牟尼至尊は今日出世して六字称揚の靈徳

(92) 其第一条…『空華談叢』三(日仏全(旧版)一四九・四六八上)。

(93) 忽然念起…『大乘起信論』(正蔵三二・五七七下)、『釈摩訶衍論』(正蔵三三・六三二上)。

(94) 下下来来…『釈摩訶衍論』(正蔵三三・六二〇上)。

(95) 還同本覚…始覚修行によって本覚が顕現し、還って始覚と本覚とが円融すること。

(96) 上上去去…『釈摩訶衍論』(正蔵三三・六二〇上)。

を讀じたまいて、互いに郢匠（97）の大巧を顕し、各懸解（98）の秘術を施したまえり。爾れ自り以降（99）三学無分の衆生等有り。皆な二死の解脱の捷徑（100）を悟れり。如来大寂の後、馬師・龍尊（101）は西天に於いて而も二仏の教迹を闡揚し、玄忠・光明（102）は東夏（103）に有りて而も六八の幽邃（104）を敷演す。誠に是れ生死苦海の大船師なり。豈に流転嶮隘（105）の大良導に非ずや。

抑（106）長老の大徳後学の宗師有り。其の号を円公大徳と曰う。螢を拾う窓の間には光明の慧燈常に耀き、雪を聚む床の頭（107）りには黒谷の清流を鎮（108）え澄めり。故に克く色裏の膠青（109）を悟り、妙に水中の塩味（110）を弁ず。柵上（111）の傀儡（112）に耽らずして、深く抽牽（113）の所為を知る。殊に別教に依りて以て能事を為し、弥陀を頼みて以て出要に勤

(97) 郢匠之大巧：郢の人が皇先に土を塗って
匠石という大工の名人にその土を削ら
せたところ、斧を振り回して鼻を傷付
けることなく土を削り取ったという故
事を指す『莊子』徐無鬼。(110)では、
阿弥陀仏が本願を起し、それに基づい

(98) 懸解：逆さづりの苦しみから解き放たれ
ること、転じて非常な苦しみを脱す
ること、転尊が南無阿弥陀仏の六字の号号と
いう菜生に必要な修行を示したことを
称賛する意味で用いられている。

の意。

(99) 二死：寿命に分限があり、形に段別がある迷いの世界の輪廻を意味する分段生死と、願力によって変化、改易することができず菩薩の身を受ける変易生死のこと。

(100) 捷徑：ちかみち。転じてある物事に通達して得る手早い方法。

(101) 馬師：馬鳴のこと。『大乘起信論』を著して阿弥陀仏の救済を説いたとされる。

(102) 龍導：龍樹のこと。『釈摩訶衍論』の著者と伝えられる。また、『十住毘婆沙論』などの浄土教に関連する著作がある。

(103) 玄忠：曇鸞のこと。石壁玄中寺で活躍したことからこのように呼ばれる。

(104) 光明：中国浄土教の大成者である善導のこと。唐の長安にある光明寺で活躍したことからこの名で呼ばれる。

(105) 東夏：中国の尊称。西の天竺を指す「西天」に対していう。

(106) 六八之幽邃：四十八願が奥深いこと。
(107) 嶮隘：険しくてせまいこと。

む。懸河の弁智有り。故に群機に応じて思慮せずして以て酬対す。其の言宏綽にして其の旨玄妙なり。設い猶子譔骸の彙いと難も論主と相い値うの者は清浄の信心の手を伸べて尊号摩尼の珠を撫うこと必せり。子公、持名居士の懇請を得て以て真宗不共の秀句を著す。幾何も無くして論成りて世に行う。倩其の憲章大義に宗趣を區別するを觀るに綱目を標挙し、大義を陳列し、方外の玄極を示して頑石の解脱を顕す。諒に是れ釈典の中不易の至教なり。

抑亦た諸子の間の絶倫の微言なる者なり。大凡そ書契ありてより以降多くの書史有りと雖も、未だ然る夫きの良墳或らず。若し斯の論文を鑑みれば則ち掩目の智も判割を待たず。是れを以て学仏稟教の道士等多く歆慕する所に而て、鉅儒搢紳の作者も亦た是れに由りて而も別教の尊重なるを知る。嗚呼、聖賢の迹を示して洪教を閑宣するに非ざる自りは、其れ孰れか能く此れに

(108) 懸河之弁智…流暢な弁舌を振るう智恵の
こと。

(109) 宏綽…大きくゆったりとしているさま。

(110) 譔骸…形が乱れて正しくないさま、不正のさまの意。

(111) 頑石之解脱…説法の功德力により無心の石さえも解脱を得ること。感化の深いさまを表わしている。

(112) 不易…かわらないこと、不変の意。

(113) 書契…文字を書き付けたもの。

(114) 良墳…「墳」に伏儀・神農・黄帝の書物という意がある。ここでは素晴らしい書物のこと。

(115) 掩目…目を覆い隠すこと。ここでは煩惱におおわれていることを指す。

(116) 判割…底本の註に「判古作割」とあり、古本では「割」の字が使用されていたようである。「判」も「割」も「割」もわかれるの意があるため、ここでは、分別・判断を指すと考えられる。

(117) 学仏稟教之道士…仏教を学び、その教えを稟受するもの。

(118) 鉅儒…大学者のこと。

(119) 搢紳…笏を礼服の大帯にさしはさむこと。転じて身分が高くて周囲に知られる人のこと。

与あつからんや。若し論主かく徴せば真宗の学徒等殆んど半珠を握りて以て家珍と為さんか。夫れ魯鈍の短筆を以て而も奚なんぞ天縦てんしよくの弁論に副えんや。然りと雖も且つは現修を励まんが為、且つは来縁を結んが為に弊文を綴りて以て書首に冠こうむらしむ。

南山の門人俊覚律師謹みて序す。

浄土十勝論序【持名居士】

蓋し聞く、淮南淮北わいなんわくほくの群英は別意の弘願を闡揚し、一百余家の諸賢に如来の本懐を談述する。並に皆道に会し機かなに称なうに非ざること無し。偕ともに嘉尚かしょうするに足れり。同じく出要しゆように備たうべし。浄土十勝論の如きに至りては、斯れ乃ち窮理尽源の格言ごごんにして、究竟無余の極談ごくたんならん。理致淵遠りしちえんえんとして群典の要を統べ、文旨婉麗えんれいにして巧妙の詞を窮む。實に是れ行人の龜鑑くわんかん、長夜ちやうやの姫灯ひめとうなり。古いにしへ自しり高判未だ之まれに加まれたるはあらず。所以に四澆しじやう豪

(120) 淮南淮北：中国の大河の一つ、淮河の以南と以北を指す。

(121) 嘉尚：尊たびほめること。

(122) 出要：迷いの生死を出離する要道、解脱を意味する。

(123) 窮理尽源之格言：物事の道理や根源を窮め尽くした上での金言。

(124) 究竟無余之極談：最後には必ず煩惱を断じ尽くし涅槃に至るための極善の談義。

(125) 理致淵遠：道にかなった趣旨、すじみちのこと。ここでは『十勝論』の理が極まっています。幽遠なものである様。

(126) 文旨婉麗：「婉麗」はしとやかで美しいさまをいう。ここでは『十勝論』の文章の流麗なる様をいう。

(127) 龜鑑：行動の基準となるもの、模範、手本などの意。

(128) 長夜：迷いの生死輪廻を繰り返し、無明の状態に留まっていることを長い夜に譬えた言葉。

(129) 四澆：長江、江河、淮河、済水の四つの中国を貫通する大河のこと。

賢⁽¹³⁰⁾の珍敬する所、八荒⁽¹³¹⁾緇素⁽¹³²⁾の頂戴する所なり。

抑^{そもそも}真言の十科⁽¹³³⁾、仏心の十勝⁽¹³⁴⁾は広く事迹⁽¹³⁵⁾を談じて、法義⁽¹³⁶⁾を明

かさず。千福の八異⁽¹³⁷⁾、慈恩の十勝⁽¹³⁸⁾は狭く、知足⁽¹³⁹⁾に対して余門に
渉らざるなり。吾が浄土十勝論は徧く樂典に対して格別の別意⁽¹⁴⁰⁾
を顕わし、多く諸教を評して式内の通軌⁽¹⁴¹⁾に属せり。

原^{たずぬ}れば夫れ幽闇⁽¹⁴²⁾を燭^{てら}す者は其れ惟れ赫日⁽¹⁴³⁾皎月⁽¹⁴⁴⁾か、瘵^{さいどく}毒を除く
者は其れ惟れ醍醐甘露⁽¹⁴⁵⁾か。大教を挙揚して生を濟い、物を利する
者は其れ惟れ菩提⁽¹⁴⁶⁾索多⁽¹⁴⁷⁾か。爰に賢士有り。厥^その名を浄円大徳と

(130) 豪賢…豪士や賢者のこと。

(131) 八荒…中国を中心として考えた八方の荒
れ地、八方の果てのこと。全世界を意
味する。

(132) 緇素…黒衣と白衣のことで、僧侶と仏門
に入っていない人のこと。

(133) 真言十科…空海が、人間の心を十段階に
分け、それに当時の代表的な思想を当
てはめていき、真言密教こそが最上の
教えであることを述べている『秘密曼
荼羅十住心論』のこと。

(134) 仏心十勝…虎関師鍊が、禅宗の諸宗に勝
れていることを示す目的で作成した『宗
門十勝論』のこと。

(135) 事迹…物事の本質ではなく、個別具体的
なものを「事」といい、仏の本地
の法門ではなく、教化のための仮の方
便を「迹」という。ここでは、仏の教
えの本質ではないところの意。

(136) 法義…ここでは仏の真意のこと。

(137) 千福八異…善導の弟子であり、千福寺に
居住した懐感の『釈浄土群疑論』(正蔵

四七・五三下)所説の西方・兜率の八異
を指す。八異とは、①本願異 ②光明異
③守護異 ④舒舌異 ⑤衆聖異 ⑥滅罪異
⑦重惡異 ⑧教説異のこと。

(138) 慈恩十勝…慈恩大師基の『西方要決釈疑
通規』(正蔵四七・〇六下)所説の西方・
兜率の十異を指す。十異とは、①命有
長短 ②処居内外 ③境分穢淨 ④身報而殊
⑤種現差分 ⑥進退修異 ⑦界非界別 ⑧
好醜形乖 ⑨捨生不同 ⑩経勸多少のこ
と。

(139) 知足…知足天のことで、兜率天と同義。

(140) 格外之別意…阿弥陀仏のみが特別に立て
た広大な誓願を指し、ここでは、通途
の仏道修行を超えたところに開かれた
法門の意。

(141) 式内之通軌…仏教を学ぶ者すべてに通ず
る教えを意味し、ここでは、通途の仏
道修行を出ることのない法門の意。

(142) 赫日皎月…光り輝く太陽と冴え渡ってい
る月。

(143) 瘵毒…病と毒のこと。

(144) 菩提索多…サンスクリット語の bodhi-
sattva の音写語で、悟りを求めるもの、
菩薩の意。

曰う。克く祖業を荷いて家声を墜とさず。上衍の尸羅清淨にして玷無く、円密の行解確固として動くこと莫し。又た、兼て淨業に孜孜たり。後進の英髦、前修の耆旧笈を負うて遠く致り、茅を抜くに連茹たり。凡そ臂歩膝行して円頓上乘の秘旨を受くるの輩千万なり。首を傾け足を礼して浄土の真宗の口訣を聞くの彙い爾許のみ。

然りと雖も、時を守り機に任せて、且く聖道を閑きて偏に浄土に入れり。六字称揚の暇日を以て、三部妙典の秘蹟を討論す。余時、俗塵に迫られて周く聴くに倦し。乃ち経論の綱格を採集して別願の玄極を註解せんことを求む。良願に違わず欣然として黙受す。諸徳聞き已りて深く相い激讚す。即ち竺墳漢典に貫穿して、隱を索し深を釣りて、日居月諸未だ幾ばくならざるに添削遽かに成る。巻を分けて以て三軸と為し、章を立てて以て九十

(145) 祖業…浄土宗の祖師の行業のこと。
 (146) 家声…浄土宗一家の誉れのこと。

(147) 上衍…上乘の意味で、大乘を指す。
 (148) 尸羅…律の音写語。

(149) 孜孜…つとめ励んでやめないさま。

(150) 英靡…俊英、靡土のことで、すぐれた人の意。

(151) 耆旧…人々から仰ぎ慕われる老人のこと。

(152) 拔茅連茹…茅の根は、一本だけを引き抜くことができないうらい互いに絡まり合っている。ここでは、澄円のもとにすぐれた者が多く集まり、学び合っていることを譬えている。

(153) 彙…同類の集まりのこと。

(154) 三部妙典…『無量寿経』『観経』『阿弥陀経』の三部の浄土経典を指す。

(155) 秘蹟…奥深い真理。

(156) 竺墳漢典…天竺の墳籍と漢語の典籍のこと。インドや中国で作成された経論を指す。

(157) 貫穿…學術などを深く極めること。

(158) 日居月諸…「居」も「諸」も「や」と読み、語調を整える言葉。『詩経』にも「日居月諸」と同様に使用されている。

と為す。蓋し三軸は是れ三部三才を幪幪し、九十は迺ち九軸九品を顕示すとなり。其の文、至簡至易にして善を尽くし美を尽くせり。寔に真宗の龜鑑、淨教の心腑なりと謂いつべき者なり。此の典、一たび出でて詮旨味からず、耆龜に正しく告ぐ。繫象、豈に外を求めんや。諸れ即ち詣西方の決要、唯だ吾が師の筆端十勝の指塵に在り。素白の請に允えりと雖も、乃ち緇皂の資、賢人の業、其れ泯びざるか。敬いて同舟を勉む。深く此の典を崇めんや。

抑そもそも 大教の東漸より以降、孰れの宗にか今の宗の如く諸の勝徳を具えたる宗教有りや。論に十勝を立つる、誠に以え有るかな。縦令たとい、三学無分の得脱を明かすと雖も、持名最上を明かすことありや不や。縦令たとい持名最上の義を明かすとも、末法の出離しゅを説くことありや不や。縦令たとい末法の出離を説くとも、具結得脱の義を許すことありや不や。縦令たとい具結得脱を許すとも、具縛

(159) 三部：胎藏界曼荼羅における、仏部・蓮華部・金剛部の三部。

(160) 三才：「才」とは働きの意味。「三才」は『易経』所説の、宇宙の万物を構成する

天と地と人の意。

(161) 九軸：善導の五部九巻を指す。

(162) 九品：九種類の往生淨土の在り方。

(163) 耆龜：年老いた龜。ここでは正しい智慧の眼の衰えた者に譬えている。

(164) 繫象：繫がれた象。煩惱に繫縛されている者に譬えている。

(165) 指塵：指し示すこと、指示と同じ。

(166) 素白：「素」も「白」も共に白色を意味し、仏門に入っていない在家の人を指す。

(167) 緇皂：「緇」も「皂」も共に黒色を意味し、仏門に入った僧侶を指す。

(168) 三学無分之得脱：『淨土十勝論』卷一、三学無分勝(第二)を指す。

(169) 持名最上：『淨土十勝論』卷二、持名最上勝(第二)を指す。

(170) 末法出離：『淨土十勝論』卷三、末法利益勝(第三)を指す。

(171) 具結得脱之義：『淨土十勝論』卷三、具結得脱勝(第四)を指す。

の凡夫起惑せざることを明かすことありや不や。縦令い纏縛不起の益を明かすとも、具纏不退の旨を説くことありや不や。縦令い凡夫不退の義を説くとも、立宗根本を明かすことありや不や。縦令い立宗根本の義を明かすとも、墳籍卓躒の義有りや不や。縦令い墳籍卓躒の旨有りとも、該教行益を許すことありや不や。縦令い該教行益の義を許すとも、超絶師範の義を明かすことありや不や。唯だ我が浄教のみ諸の勝徳を具足せり。幸いなるかな。小子、此の大教に逢値して以て順次の得脱を求む。生前の大慶、何事か之れに加えんや。

素衣の弟子、持名居士恭みて序す。

浄土十勝箋節論序【澄円】

夫れ珠璧の中、尤も奇絶なるは是れ梵摩尼珠か。香木の間、甚だ勝妙なるは迺ち梅檀の与楽か。曇摩迦索多の大悲本誓、其れ然らざらんや。粵に持名居士と云う人有り。身、鬘塵に交わると雖も、心、常に浄域に棲む。乃ち相い命じ談話す。遂に弘願

(172) 具縛凡夫不起惑：『浄土十勝論』卷三、具縛不現勝（第五）を指す。

(173) 具縛不退之旨：『浄土十勝論』卷三、具不退勝（第六）を指す。

(174) 立宗根本：『浄土十勝論』卷四、立宗根本勝（第七）を指す。

(175) 墳籍卓躒：『浄土十勝論』卷四、墳籍卓躒勝（第八）を指す。なお「卓躒」とは超絶しているの意であり、それ以前にあった古い書籍を超絶していること。

(176) 該教行益：『浄土十勝論』卷四、該教行益勝（第九）を指す。

(177) 超絶師範之義：『浄土十勝論』卷四、超絶師範勝（第十）を指す。

(178) 珠璧：「珠」「璧」ともに玉の意で、ここでは数ある諸々の玉を総称する意。

(179) 梵摩尼珠：摩尼宝珠のこと。意に従って衆宝を出すことのできる宝珠。『觀經』や『弥勒上生經』にも見られる。

(180) 曇摩迦索多：法蔵菩薩の異名で dharmacakara の音写。

(181) 持名居士：『浄土十勝論』の發願者。序文を書いている。

(182) 鬘塵：「鬘」はかまびすしい「塵」はけがれ。ここでは世俗を意味する。

の宗旨を詳勘して、以て致迷の学者を激励せよと請う。已むを獲ず傷手の誠を犯して、一大藏経を徧覽して余教の絶離する所、他氏の談ぜざる所を摘みて浄土十勝を立つ。一字一句も本づく所無きこと無し。幸くは人を以て徴せしめて其の文義を忽せにすること勿れ。人人共に曉了せんことを欲す。故に其の言、質にして文ならず。冀くは味道の君子、義学の精人、之れを披きて而も惑わず、之れを尋ねて悟り易からん。其れ猶お鸞鏡を執りて像を鑑み、龍泉を持ちて、以て物を断たんがごとくせよ。蓋し之れを述するの志なり。愚見不敏なり。胡ぞ必ず当らんや。庶くは通鑑の士、詳らかに正して之れを刪れ。若し残る所の靈徳有らば、来る者之れに続け。或いは刪略、或いは加添、只だ後賢に任せて全く自ら専らにせず。

抑今小子、愚管を以て而も卑志を述して以て先聖に続く。是れ乃ち嘒星、朝陽に継ぎ、飛塵の華岳に集まるの謂なり。浄土は所生の器界なり。世に十勝論を伝える者、一ならざるが故に、浄土を以て之れを別つ。十勝とは、浄教の衆典に卓犖し、念

(183) 傷手誠：『大智度論』（正藏二・五・五九四上）などに、緩やかに管草を抜き取る時は手を傷つけ、急いで抜くときには無傷であるという喩えがある。ここでは、不敏な自己が『浄土十勝論』を上梓したことを謙遜するためにこの喩えを用いている。

(184) 徴：厳しく申しつけること。

(185) 鸞鏡：想像上の鳥を裏面にかたどった鏡。

(186) 龍泉：楚の宝剑の名。三劍のひとつ。

(187) 通鑑の士：「通」は通す、「鑑」は手本の意。ここでは論の手本、規範となるものを広めようとする者の意。

(188) 愚管：愚かで狭い見識。

(189) 嘒星：嘒々之謂也。「嘒星」は小さな星々の光。「飛塵」は空中を浮遊する塵の意で、澄円自身を喩えたもの。「朝陽」は大きな朝日の光。「華岳」は花の咲く山の意で、先徳を喩えたもの。澄円は先徳の業績をたたえ、自身の業績を謙遜してこのように喩えている。

仏の万行に超絶することを顕す。又た十は常の十に非ず。是れ則ち乾坤の十にして、能く真俗の方法を覆載す。勝は常の勝に非ず。亦た則ち勝中の勝にして不共の教行を顕示するのみ。箋とは表なり、識なり、書なり。亦た牋に作る。夫れ鄭康成が、毛氏『詩伝』の未だ尽くさざる者を行ぶるを名づけて箋と曰うに借る。節とは操なり。操は把持なり。又た節は毛を以て之れを為る。上下相重し、象を竹節に取る。因りて以て名と為す。命を將てする者、之れを持して、以て信と為んや。論は賓主酬酢し、言話交馳して而も深隠なるものを索釣し、決折角し循環研竅して奥蔵を開頭するを之れ謂うや。書に十篇有り。一に曰く三学分外勝、二に曰く持名最上勝、三に曰く末法利物勝、四に曰く具結得脱勝、五に曰く具縛不起勝、六に曰く具纏不退勝、七に曰く六宗根本勝、八に曰く墳籍卓礫勝、九に曰く該教行益勝、十に曰く超絶師範勝なり。

正中闕逢困敦黄鐘生十五葉伝、浄土教菩薩大乘戒比丘澄円自序

(190) 鄭康成：鄭玄（じょうげん）のこと。字を康成という。あらゆるの経書『周易』論語『孝経』の注釈を施している。『毛氏鄭箋』という著書もある。

(191) 毛氏詩伝：『詩経』のこと。

(192) 把持：手でものを持つこと。

(193) 取象竹節：竹の節が何層にも重なっているように、何重も論を重ねるといふことの譬え。

(194) 賓主酬酢：賓客と主人が互いに酒を酌み交わすこと。ここでは教説が議論を繰り返して円熟したものであることを主張するための譬え。

(195) 言話交馳：話を互いに馳せ、話が充実すること。「賓主酬酢」と同様に、教説が円熟されたものであることを主張する譬え。

(196) 決折角循環研竅：種々あるものから選び取り、力を尽くして繰り返し検討すること。

跋文十九章

【承蒙】

窃ひそかに以おもれば、性海（明）の浪の上には、四曼（明）の依正色鮮やかに、

本覺の月の前には八万の塵勞（明）、影朗らかなり。曾て去・来・今

の異無く、更に生・住・異の相（明）を離れたり。爰こに我等、解脱

の玉床に臥し乍ら、無明の昏睡未だ寤さめず。波若（明）の深窓に居り

乍ら、妄想の孤夢（明）頻りに結ぶ。且つ遇（明）三密（明）の壇場に臨むと雖も、

五相成身（明）の觀念（明）就り難く、遇（明）十如（明）の解行を作すと雖も、止觀

現前の勝利（明）顕れず。然るに多生の夙善（明）に由りて、十勝（明）の指麾（明）に

値い、立ちどころに二死解脱（明）の方軌を悟りて、克よく九品往生の

直因を勤む。此の『十勝論』は持名居士一人の致請に由りて、淨

土数十の靈徳を顕すと雖も、其の益広く顯密淨侶の兩輩に通ず。

抑論主は是れ我等が入室の同朋なり。我等はち論主（明）庭訓（明）の

(197) 性海：真理そのもの。真理を海に譬えた。

(198) 四曼：四種曼荼羅のこと。①大曼荼羅。②三昧耶曼荼羅。③法曼荼羅。④羯磨曼荼羅。

曼荼羅。

(200) 塵勞：煩惱のこと。

(201) 去来今：過去・現在・未来のこと。

(202) 生住異相：三有為相のこと。生起（生）と

存続（住）と壞滅（異）をいう。

(202) 波若：「般若」と同義。さとりを得る真実の智慧。

(203) 三密：身・口・意の三種のはたらき。

(204) 五相成身：密教の観法の一つ。通達菩提心・修菩提心・成金剛心・証金剛心・仏身円満の五相の観法をなして金剛界

(205) 大日如来の身を成就すること。

(206) 十如：十如是のこと。『法華経』方便品の説に基づき、諸法の実相が相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟という

(207) 夙善：「宿善」に同じ。

(208) 指麾：「指揮」に同じ。

(209) 二死解脱：二死は分段生死と變易生死の二種生死のこと。分段生死とは肉体の大小や寿命の長短など一定の際限がある凡夫・学人などの生死であり、變易生死とは肉体や寿命を際限なく自在に変化改易できる阿羅漢・菩薩などの生死である。凡夫と菩薩の両者が解脱を得ること。

(210) 庭訓：教訓のこと。

門役なり。世世互いに師資たり。処処に迭に要法を受く。今度各各に生死截断の期到来して、面面に証大菩提の妙行を致す。生前の大慶胡絳か之れに加わらんか。夫れ彼の論主円公闍梨は体識深静にして風度端敏なり。堯言玉のごとくに振い、微文氷のごとくに積く。筆芸是れ高妙にして、法語も亦た奇異なり。聖旨に冥契し神会に綽同す。万世の後、作者有りと雖も、亦た此れに過ぐるは無けん。聞法得益の洪恩を報酬せんが為に、法印大和尚位経印、権少僧都法眼和尚位承豪、力を勦せ志を一にして俱に跋す。

時、元応第二の暦、上章涪灘大簇三五の日、台嶺本院東谷に於てす。

【薬西】

一日、余が友、持名居士、此の典を携えて以て予に示して曰く「此れは乃ち浄円大徳、弟子が致請に酬えて製述さるるの書なり。宣揚是れ妙に、発起良に多し、義門を標掲し名相を訓剖するに

(210) 門役：門番のこと。

(211) 体識：体（身体）と識（心）のこと。

(212) 風度：人の性格や態度、風格のこと。

(213) 堯言：内容ゆたかな言説。

(214) 冥契：言葉を交わさずに心が通うこと。

(215) 元応第二之暦：西暦一三二〇年。干支は

庚申。

(216) 上章：十干の庚の異称。

(217) 涪灘：十二支の申の異称。

(218) 大簇：陰暦一月の異称。

(219) 台嶺：比叡山のこと。

(220) 浄円：澄円の別名。昇蓮社・旭蓮社とも。

(221) 宣揚：広く天下にあらわすの意。

(222) 発起：開き起こすこと。

(223) 訓剖名相：文字に書きあらわされた論述を読み、明らかにすること。

至りては、文約かに事広く、詞微かに理明なり。他師の詳勸も源と経釈より出でて本と宗旨を詮すと雖も、若し能く弥陀願海の淵底を尽くし、京師判教の玄旨を窮めたるは、只だ是れ吾が師の論説のみなり。座右に安じて龜鑑に備えよ」と。余、即ち此の典を披きて以て其の義を觀、其の真味を節角の処に於て翫び、之れが為に掌を撫し、節を撃ちて感激せり。凡そ其の教を叙ぶるや円かに、其の法を見るや徹せり。其の義を積するや端しきこと薪を折るが如く、其の文に入るや明らかなること燭を秉るが若し。其の辞は理を極むるのみにして虚しく騁せず、其の説は教を扶くるのみにして苟くも飾らず。其の長せる所を以て人を病さず。故に排斥の説無し。其の未だ至らざるを以て人を蓋わず。故に胸襟の論無し。蕩蕩然として実に一代教の眼目なり。曜曜焉として迺ち光明・黒谷の骨髓なり。生靈の大本、三世の達道なり。後世、著述の者有りと雖も能く之れに過ぎたるはあらず。其れ四依の一なるか、或いは浄土の親聞なるか、何ぞ其の義味を尽く

(224) 文約事広：文章は簡潔ながら事柄を広く解き明かすの意。

(225) 詞微理明：詞は奥深く理論は明快であること。

(226) 詳勸：詳しく説明すること。

(227) 京師判教之玄旨：善導大師の奥深い教えのこと。

(228) 節角之処：文節や章段のこと。

(229) 撫掌撃節：手の平を打ち、我が意を得たりと歡ぶさま。

(230) 騁：まっしぐらに走る。ここでは「のべる」の意。

(231) 胸襟之論：心の中に隠し持っている論説。

(232) 蕩蕩：広大なさま。

(233) 生靈之大本：衆生にとっての大きな手本。『鐺津文集』などを参照（正蔵五二・七〇三中）。

(234) 三世之達道：過去・現在・未来を通じての仏道修行の道標。

(235) 四依：法四依（法・義・智・了義）のこと。

(236) 浄土之親聞：浄土において仏から親しく聞いたこと。

すこと此の如くなるや。寔に是れ命世の宏範⁽²³⁷⁾なり。豈に金刹の良導⁽²³⁸⁾に非ずや。ああ、奇なるかな奇なるかな。牟尼大我⁽²³⁹⁾去りたまひし自り後、其の声を継ぐ者有ること謾⁽²⁴⁰⁾し。今其の作すは世尊の再来に非ずんば孰⁽²⁴¹⁾れか能く為んや。居⁽²⁴²⁾以れば玉を琢⁽²⁴³⁾きて器を成すといえるは孔聖の格言なり。然るに今大徳子公、経論解釈を採集して篇を立つ。格外の勝徳論⁽²⁴⁴⁾り易し。所以に小子恭しく英髦⁽²⁴⁵⁾の著述を披きて深く浄教の奇絶⁽²⁴⁶⁾なることを知る。

厭欣居士楽西頓首謹みて跋す。

【尊海】

夫れ以⁽²⁴⁷⁾れば、余、多幸にして此の典に値⁽²⁴⁸⁾えり。其の筆削を觀るに、固⁽²⁴⁹⁾に臆説⁽²⁵⁰⁾に非ず。頗る亦た精微なり。是れ則ち、其の本拠とする所の明文、皆な洪経・大論⁽²⁵¹⁾より出でて、而も最も詳らかなる所以なり。又た其の所見の書、果して謬⁽²⁵²⁾れるは古書と雖も必ず之れを斥⁽²⁵³⁾い、其の所覽の典、果して詳らかなれば新典と雖も必ず之れを取る故か。

(237) 命世之宏範：その時代で最も勝れた教え。

(238) 金刹之良導：極楽浄土への良き導き。

(239) 牟尼大我：釈尊のこと。「大我」とは涅槃の境地に入られた仏を指す。

(240) 奇絶：すぐれてめずらしいこと。

(241) 孰：証拠の無いあて推量。

(242) 洪経・大論：「洪」には大きいなど広範の意味があり、ここでは「洪経」は広範なる経典を指し、「大論」は大部の論書を指す。

嘉祥、言えること有り。「言、道に会せざるをば破して収らざれ。説、必ず理に契えるをば取りて破さざれ。教を学して迷を起すを亦たは破し、亦たは収る。其の能迷の情を破して、所惑の教を収取す」と。

凡そ仏教の光賁こうほん 古に振うと雖も未だ此の如くなる者有らず。

天台の『十疑』、慈恩の『要決』、千福の八異、基師の十勝も之れに及ぶこと能わざる所なり。凡そ九品教の秀句を集めて兩三巻の竹牒に載せたるは、北斗以南には只だ吾が『浄土十勝論』のみか。所以に鉅公・名儒も専ら之れを珍敬し、顕密の高僧も大いに之れを許可す。但だ彼此の章段、水乳混濫せり。鵝王の学士に非ずば、奚ぞ弁じ易からんや。高判の秘蹟、壁立千仞なり。騰空の威力無くば、豈に及ぶべし。加之、文章詞花、人に

(243) 嘉祥…吉蔵。中国隨代の代表的な仏教学者。三論教学を主とする。嘉祥寺に住していたので嘉祥大師といわれる。

(244) 吉蔵『三論玄義』（正蔵四五、一頁中）。

(245) 光賁…「賁」には文章のさまを指す。こ

(246) ここでは仏教の經典が整ったことをいう。天台十疑…智顛『浄土十疑論』（正蔵四七所収）。

(247) 慈恩要決…基『西方要決釈疑通規』（正蔵四七／浄土六所収）。

(248) 九品教…浄土教を指す。

(249) 北斗以南…北斗星から南方にかけてを指す。ここではこの世の中すべてをいう。

『旧唐書』（列伝第三十九、狄仁傑伝）に「授并州法曹參軍、同府參軍鄭崇質、母老且疾、当使絶域、仁傑詣長史蘭仁基請代行、蘭仁基毎日、狄公之賢、北斗以南一人而已」とある。

(250) 鉅公…天子の尊称。

(251) 名儒…すぐれた儒学者のこと。

(252) 鵝王…仏をたとえる。仏の三十二相の一つに、手足にみずかきがあることされる。それらのみずかきが鷺鳥の足に似ていることから「鵝王」といわれる。

(253) 壁立千仞…絶壁などがけわしく壁のように立っていること。「仞」は長さの単位。山などの非常に高いこと。谷などの非常に深いこと。「千尋」も同様。

(254) 騰空…大空にのぼる。

(255) 文章詞花…すぐれた文章表現をいい、ここでは『十勝論』の文章が人が書いたものを超えていることを表わしている。

過ぎ、索隱釣深さくいんちゆうじん、絶倫なり。末学膚受まつがくふじゆの彙たくいの輒く解すべき所に非ず。若し之れを知らんと欲する者は、能く字字句句・章章義義、其の義を研究すること有りて、以て未審なる所は、諸を卓然たる拔萃たつさいの大智者に質すときは、則ち精義、神たましいに入りて、然して後に以て此の典の深旨を知るべし。若し軽心に疾く読みて所帰を究めずんば、定んで自失悞他の大過を招きて、而も八万大劫の獄果を受くべし。

古に云わく、夫れ鰭ひれを濫觴らんしやうに挙ぐるもの、曾て千里の鯤こんを見るに由無し。翻はねを藩籬はんりに糞はうつものは、何ぞ能く九万の鵬おわとり有ることを知らん。是の故に海上の頑人は魚の如くなる木あらんと疑い、山頭の愚士は木の如くなる魚あらんと怪しむ。則ち知んぬ、

(256) 索隱釣深：「索隱」はすぐれた事理を捜し求めることをいい、「釣深」は深義を求めるところをいう。

(257) 末学膚受：「末学」は学問が未熟なものを指し、「膚受」はうわべだけで充分に理解していないことをいう。

(258) 拔萃：「拔粹」に同じ。多くの中から抜きん出ていること。

(259) 古云：空海『三教指帰』（弘法大師全集）三、三四五頁にほぼ同文あり。
(260) 拳鬚けんす濫らん千里鯤こん：小さな川にいる魚は、鯤という千里もの大きな魚をみることに

(261) はないという喩え。「濫觴」とは、『荀子』に「其始出也、其源可以濫觴」とあり、ものごとの源、始まりという意がある。ここでは長江のような大河の源流を指す。「千里鯤」とは、『莊子』逍遙遊篇に「北冥有魚、其名爲鯤、鯤之大、不知其幾千里也」とあり、大きさが千里もあるという想像上の大魚をいう。

(262) 飛翻ひはん藩はん九万鵬くわんぱう：垣根の間を飛び交うような小鳥は、一度に九万里を飛ぶという大きな鳥がいることを知らないという喩え。「藩籬」とは垣根をいい、「飛翻藩籬」とは垣根の間を飛び交う小鳥を指す。「九万鵬」とは『莊子』逍遙遊篇に「北冥有魚、其名爲鯤、鯤之大、不知其幾千里也、化而爲鳥、其名爲鵬、鵬之背、不知其幾千里也、（中略）諧之言曰、鵬之徙於南冥也、水擊三千里、搏扶搖而上者九萬里、去以六月息者也」とあり、先述の鯤が化して鳥となったもので、一度に九万里を飛ぶという。

(262) 海上頑がん如木魚にほきぎよ：海辺に住む頑迷な人は魚のような木があるろうかと疑い、山に住む愚かな人は木のような魚があるろうかと怪しむという故事。『顔氏家訓』歸心篇に「山中人不信有魚大如木、海上人不信有木大如魚」とある。

離朱が眼に非ざれば、人、毫末を見ること無し。子曠が聡に非ざれば、何ぞ能く鐘響を別たん。咨、見ると見ざると、愚と愚ならざると、何ぞ其れ遙かに隔たるや。

此れは三字域内の通談を狭みて、而も十勝格外の別論を識らざるの謂いか。

爰ここに貧道頃年の比、茲の典を披閱して、粗ぼ素意を識り、廓然として掌を拍つ。五翳を披きて三光を見るが如く、甘露を服して療毒を除くに似たり。凡そ四海を挹みて以て水と為し、九山を燒きて以て墨と為し、千草を折りて以て筆と為し、黄地を夷らげて以て白麻と為すとも殫く紀すべからず。是れ此の書の源底なり。若し人、奥義を究めんと欲せば、管を以て大虚を窺うこと勿く、蠡を取りて而も巨海を挹むこと勿くして、直爾ちに文義を得ん。若し爾らば、師の素意を得んこと、間に髪をも容る

(263) 非離朱く見毫末：離朱のように視力がすぐれていなければ、離れた場所から細い毛の先はみることはできないことをいう。「離朱」とは『孟子』の趙岐注に

「離朱即離婁也、能視百歩之外、見秋毫之末」とあり、中国の伝説上の人物で視力がすぐれており、百歩離れた場所からでも毛の先がみえた。離婁(りろう)

(264) ともいう。「毫」は細い毛。

非子曠聡何能別鐘響：子曠のように耳がよくなければ、鐘の響きの些細な違いも聞き分けることができないということ。「子曠」は師曠か。師曠は字を子野といい、中国春秋時代の晋の平公に仕えた楽人。盲目であったが琴の名手であり、耳がとてもよかった。師曠については『孟子』や『呂氏春秋』などにみられる。「聡」には耳ざとい、察知するなどの意がある。

(265) 五翳：日や月の光を遮るもの。煙・雲・塵・霧・阿修羅の手を指す。

(266) 三光：日・月・星の光。

(267) 四海：須弥山をとりまく四方の海。

(268) 九山：須弥山を囲う九つの山。

(269) 夷乎黄地以為白麻：大地を平らかにして、紙面とするの意。「黄」は土の色を指し、「黄地」とは大地を指す。「白麻」とは唐の中書省において綸命をなすために用いられていた麻紙をいうが、単に紙を指す場合もある。

(270) 蠡：ひょうたんなどをふたつに割って作った容器。

べからず、水、瓶に溢るべからず。若し爾らずして、強ちに自を以て而も他を測る者は不敏の甚しきなり。設い塵劫を経るとも、いよよ弥懸遠ならんや。

そもそも抑、高卑の皂白、力を出だして而も共に此の書を広む。肆こに予、自ら二部を写して四輩に授与す。此れ即ち師の道をして普く天下に流行せしめんが為なり。

沙門尊海、謹んで題す。

【隆珍】

夫れ仏日、再び扶桑の朝の梢あした こすえ かがやに曜けること、是れ十勝の力なり。法雲重なりて、波母山の嶺なみに聳そびえることは、乃ち節箋せつせんの徳なり。そらも抑昇蓮社浄円の、釈氏しやくしに在りて真宗を闡揚する。異説の辞を排斥して、而も之れを闡ひらく。咸な援拋えんたう有り。所謂る「百川を障さうえて東ずるに、之れ狂瀾して既に倒れたるを廻かえす」者なり。観くわんずれば夫れ竺墳支籍じくふんぼくせきを載すと雖も、其の枝葉を刪けずり、採るに華菓を以てす。文、本説に於て繁きこと有れば、略して関節の義を

(271) 尊海：後述の隆珍の跋を参照。

(272) 仏日：仏を太陽に喩えた語。

(273) 波母山：日本のこと。

(274) 節箋：『浄土十勝論』のこと。

(275) 釈氏：僧侶のこと。

(276) 援拋：出典・根拠のこと。

(277) 障百川く於既倒：韓愈『進学解』の文。

(278) 竺墳支籍：仏典。竺墳漢典のこと。

叙し、経論に於て要有れば、必ず淵底を尽くす。凡そ別意弘願の衆徳、極要は貝文・漢典の褒讚する攸なれども、只だ広文を散在して、未だ一処に在かざるのみ。爰に吾が上人大和尚のみ独り四十有八の篇目を挙げて、数百箇条の文義を集めて、皆な其の部に依りて、悉く根源を尽くす。寔に是れ兩尊出世の正旨なり。豈に梵僧指授の文疏に異ならんや。予、鑽仰して弥堅高なることを覚ゆ。後進晩学、論り難からん者か。古に云わく、下俚巴人は、天下皆な和し、陽春白雪は韻高くして、和寡なし。巴歌は是れ他書か。雪典は乃ち今の典のみ。倩以れば、黒谷の十疑は、尚お式内の闕域に廻り、吉水の選択は、只だ二八の勝徳を挙ぐ。然るに章目は、六八に満ち、文義万条に幾とすることは、唯だ吾『十勝論』のみ。『仏祖統紀』に云く、

義神智が云く、吾が仏出世して諸経を説くと雖も、本懐を暢ぶることを得るは、唯だ法華に在り。阿難結集して自り後ち、天親、論を作りて、通経すと曰うと雖も、然るに但だ文を約にして義を申べて、其の大略を挙ぐるのみ。斯の経の大

(279) 貝文：貝葉に書かれた経文。

(280) 梵僧指授の文疏：善導『観経疏』のこと。結語には云々とある。

(281) 下俚巴人：人里はなれたところとそこに住む人。

(282) 陽春白雪：楚の国の歌曲の名。転じて、高尚な詩を称する。

(283) 巴歌：村落で歌われる俗曲。

(284) 黒谷十疑：底本の頭註に「黒谷十疑未考」とある通り、不明の典籍である。

(285) 闕域：門中のしきいの内。

(286) 吉水選択：法然『選択本願念仏集』のこと。

(287) 二八の勝徳：『選択集』全一六章段に示される念仏の功德のこと。

(288) 義神智：なりと：『仏祖統紀』（正蔵四九・一八六上）。

事に至りては、教化の始終は則ち晦くして、未だ明らかならず。羅什、翻訳するに癡おぼんで、東の方、此の土に伝わり、疏を造りて、消釈する者、異論、一に非ず。唯だ我が智者は、靈山まのあたに親り承け、大蘇に証悟して、妙旨を發揮し、上乘を幽贊す。五義を以て経題を釈し、四釈をもて文句を消す。而るに、又た能く十章を以て、明静の法門を宣演す。是に於て、解行俱に陳べ、義觀兼ねて挙ぐ。謂つべし。行人の心鏡、巨夜の明灯なりと。天竺の大論と雖も、尚お其の類に非ず。豈に震旦の大師の能く跋かた及ぶ所以ならんや。云云。又た問いを設けて曰う。『輔行』⁽²⁹¹⁾に九師の相承を引きて、北齊已前は今の所承に非ずと謂う。且く北齊既に覺心は重觀三昧を用ゆ。今此ここに何が故ぞ、覺觀(292)は但だ是れ一轍なるのみと斥きえるや。將に智者は、北齊を斥うかがうに非ずや。答う。『妙玄』⁽²⁹³⁾に法華の十妙を開演して、尚お云く『中論』を以て相比することと莫(294)れ」と。又た云く「天竺の大論、尚お其の類に非ず」と。蓋し智者、如来の慧(295)を用いて法華の妙を明かす。故に龍樹、

(289) 『輔行』…湛然『止觀輔行伝弘決』のこと。

(290) 觀…底本の頭註に「觀統紀作覺」とあるとあり、『仏祖統紀』には「觀」を「覺」とある。

(291) 『妙玄』…智顛『法華玄義』のこと。

(292) 智顛『法華玄義』(正蔵三三・七二三下)。

(293) 智顛『法華玄義』(正蔵三三・七〇四下)。

(294) 慧…底本の頭註に「慧統紀作意」とあるとあり、『仏祖統紀』には「慧」を「意」とある。

北齊及ばざる所なりと。

斯の言『十勝論』に通じて、而も其の意を得たり。凡そ諸老、力を尽くして、此の典を弘伝するに、皆な湜輩(295)の用心に籍するなり。抑尊海大徳は、是れ俗に在りては連枝(296)なり。家を出ては門師となり、顯密の達士、法門の領袖(297)為りと雖も、得道の徑路を十万億土の西に定め、解脱して要行を六字尊号の法に勤む。然るに持名討論の余暇を以て『十勝論』を写して、欣然として跋を作らる。

或る時示して曰く「此の典、広通流行せよ」と。此の言を謹みて許諾す。師久しからず大寂に歸す。今其の後に続き、同志を率いて三本を写して、以て師の志を成ず。

欣西庵住持嗣祖苾芻(298)隆珍謹みて跋す。

【乗空】

窃(299)かに以れば、『華嚴論』(300)に曰く「若し法性に随えば、万相都(301)て無し。若し智力に随えば、無相随いて現ず。隱顯縁に随いて都(302)

(295) 湜輩…心清らかな人々のこと。

(296) 連枝…兄弟のこと。

(297) 若し法に者無し…李通玄『新華嚴經論』

一三（正藏三六・八〇五中）。

て作者無し」と。其の智力随現の中に二種の要門有りて、九界の群品を招引す。研真截迷⁽²⁹⁹⁾する、之れを聖道の修行と謂い、信仏往生する、之れを浄土の捷徑⁽³⁰⁰⁾と謂うなり。爰に弘経済生の老哲有り。厥⁽³⁰¹⁾の名を浄教円宗に象⁽³⁰²⁾れり。神機秀発⁽³⁰³⁾して恵解天縱⁽³⁰⁴⁾なり。知見甚だ高くして、諸方を下視⁽³⁰⁵⁾する。仏吼⁽³⁰⁶⁾を以て哮吼するに、人、其の量を涯⁽³⁰⁷⁾むること無し。一隅に滯⁽³⁰⁸⁾らず、玄旨⁽³⁰⁹⁾を撃揚す。七縦八横⁽³¹⁰⁾、無礙自在なり。常に赤播⁽³¹¹⁾を立て、論鼓を鳴らして、以て古今の老宿を拉⁽³¹²⁾く。凡そ諸老、皆な蒲⁽³¹³⁾を以て哺⁽³¹⁴⁾と言い、鹿を以て馬と言う。是れ則ち「不惜仏意取人情⁽³¹⁵⁾」の奸偽⁽³¹⁶⁾なり。公、独り鹿を以て鹿と言い、蒲⁽³¹⁷⁾を以て蒲と言う。豈に「但惜正宗不諂詐⁽³¹⁸⁾」の大人に非ずや。古に云わく「地、山を撃⁽³¹⁹⁾げて、

(299) 研真截迷：真理を究め、迷いを断つという意。
 (300) 浄土之捷徑：速やかに浄土に往生し得る方法。
 (301) 九界之群品：十界のうち、仏界を除いた残りの九界に住むさまざまな衆生。
 (302) 象：弘経済生に象を以て象れり。
 (303) 神機秀発：神妙な発露をすること。
 (304) 恵解天縱：智慧をもって物事を理解する能力が、生まれつき備わっていること。
 (305) 下視：下を向くこと。
 (306) 仏吼：如来の説法の意。如来が大衆にむ

かつて堂々と教えを説き、邪説を排して異教の徒を怖れさせるのを、獅子が咆哮して他の獣を怖れさせるさまに譬えた語。転じて雄弁をふるうことをいう。ここでも同義で用いられている。

(305) 玄旨：玄妙なる趣旨の意。
 (306) 七縦八横：縦横自在に自分の思うままにできるさま。
 (307) 赤播：「赤旗」と同義。注意を促す旗。

(308) 蒲：淡水の湿地に生える、ガマ科の多年草。
 (309) 哺：日暮れ、夕暮れ。
 (310) 不惜仏意取人情：般舟讚（正藏四七・四五二下）。

(311) 出典不明。
 (312) 地山をくが如し：『景德伝燈録』七（正藏五一・二五三中）、『聯燈会要』四（正統蔵七九・四五上）などには、盤山宝積禪師の詞として「似地擎山。不知山之孤峻。如石含玉。不知玉之无瑕」とある。盤山宝積禪師とは、馬祖道一の弟子であり、唐代に活躍した禪師である。

(313) 蒲：淡水の湿地に生える、ガマ科の多年草。
 (314) 哺：日暮れ、夕暮れ。
 (315) 不惜仏意取人情：般舟讚（正藏四七・四五二下）。

(316) 奸偽：不正、偽り。
 (317) 蒲：淡水の湿地に生える、ガマ科の多年草。
 (318) 但惜正宗不諂詐：但し、正統の道に諂ふことせず。
 (319) 撃：打つ、叩く。

山の孤峻を知らざるに似たり。石、玉を含みて、玉の瑕無きことを知らざるが如し」。此れは是れ緇皂素白の学者等、日に公に謁して、公の宏才智弁を測らざるを之れ謂うか。宜なるかな、雪山童子の曩躅を慕い、章安尊者の蹤跡を恋いて、将来を憫いて、竹牒に繕ずること惟れ多し。其の中の張本は即ち是れ『浄土十勝論』という者なり。広く経論の明文を集せり。最も学者の弄珍に足れり。観ずれば夫れ、諸宗根本勝は判教の大綱、三学分外勝は安心の鑿鍵、念仏功德勝は起行の良媒、法滅利益勝は慈悲の究極なりや。数十の篇章、皆な此の四つが中に摂し尽くす。諸れ抑卷は三軸を出でず、章は百科に曼ばずと雖も、一大

(313) 孤峻：孤高峻厳の略。極めて厳しく、かけ離れて高い境地にいること。

(314) 雪山童子之曩躅：『涅槃経』一四に説かれる釈尊の前世の姿である雪山童子の故事。帝釈天が童子の道心を試すために羅刹に変身し、雪山偶（諸行無常是生滅法生滅滅已寂滅為楽）の前半二句

を唱えると、それを聞いた童子は残り二句を聞くために、進んで我が身を投じて羅刹に施したという。

(315) 章安尊者之蹤跡：前掲註「雪山童子」と同様に、大切な遺教を筆記し、後世に残したという章安尊者の功績のこと。章安尊者とは、唐代の天台宗の僧であ

る灌頂を指す。浙江省臨海県章安の人であるため、章安尊者とよばれる。灌頂は智顛に従って金陵の光宅寺に入り、天台の教相と観心を学ぶ。以後智顛の侍者となり、智顛の講説を筆録して後世に残した。今日智顛の遺教に不足がないのは、灌頂の力あつてのものといわれる。

(316) 張本：事のもと、おこり。

(317) 弄珍：学者の知的欲求を満足させる貴重な資料。

(318) 諸宗根本勝：『浄土十勝論』巻四、立宗根本勝（第七）を指す。

(319) 三学分外勝：『浄土十勝論』巻一、三学無分勝（第二）を指す。

(320) 鑿鍵：門扉の鍵のこと。

(321) 念仏功德勝：『浄土十勝論』巻二、持名最上勝（第二）を指す。

(322) 良媒：良い橋わたしとなるもの。

(323) 法滅利益勝：『浄土十勝論』巻五、法滅利物勝（第二十二）などを指す。

藏教を呑納し、六八の深邃を索釣す。喩えば五岳をや一筐の山に蔵すが如く、又た四海をや寸波の水に納めたるに似たりや。巧なるかな筆端に口有るが故に、多く説くも少なく説くも、皆な剩語無し。悉く明玉か。併せて黄金か。寔に是れ智人の龜鑑なり。亦た即ち行者の明灯なりや。孰か帰仰せざらん者か。爰ここに愚智水、牛溲よりも浅く、鑽仰、蟻垤よりも卑し。卑浅の小量、巨海の深広を窺わずと雖も、忝く瓦礫を珠玉の辺に投げて、勲ろに値遇を金蓮の上に期す。

遊方仏子乗空、謹みて跋す。

【吽慶】

詳らかにするに、夫れ仏日東漢の地を照らし、淨雨杖桑の梢を沾せし自從り以降、帰仰稍多かれども、旨を得るもの太だ稀なり。爰ここに澄公大徳有り。神機卓抜にして、精彩群に超えた

(324) 六八深邃…四十八願の奥旨。

(325) 索釣：索隱釣深の略。索隱釣深とは、「索隱」はすぐれた事理を捜し求めること

をいい、「釣深」は深義を求めることをいう。

(326) 五岳：中国の信仰上の五つの霊山。五行思想の影響により生じ、泰山（東岳）・衡山（南岳）・華山（西岳）・恒山（北岳）・嵩山（中岳）をいう。

(327) 一筐：一つのあじか（土・草・野菜などを運ぶのに用いる、竹・葦などで造られた用具）。また、それに盛った土。転じて、わずかなものの譬え。

(328) 剩語：余分な言葉。

(329) 牛溲：牛の足跡に溜まったごくわずかな水。

(330) 鑽仰：仰ぎ、深くきわめること。

(331) 蟻垤：蟻が地中に巢を作るために地表に持ち出した土砂でできた小さい山。

(332) 仏日：仏の光。仏の徳が無明の闇を打ち破ることを日に譬えた言葉。

(333) 帰仰：仏教に帰依し、深く信仰すること。

(334) 神機：霊妙なはたらき。

(335) 精彩：生き生きと活力にあふれた様子。

り。且つ善く石間の玉を磨き、能く淵底の珠を瑩く。故を以て、内外の縑細は悉く心蔵に収め、顕密の法水は大いに舌海に湛う。虚心に道を弘め、己を忘れて物を済う。若し師子吼する則んば大いに増語を得、若し決断する則んば甚だ射術を獲たり。大底言行清高にして、翹勤懈ること亡し。抑世に傲慢の輩有りて、深く牛涇と海水同一の思いに住して、堅く迷盧と罌土無差の心生ず。所以は、或いは誑念を以て法要を偷み問わしめ、或いは野心を以て座右に昵近す。然りと雖も、公、専ら捨受に住して面に異色無く、反りて憫憐を生じて語に妙旨を談ず。寔に是れ檀・忍二度成熟の開士のみ。嗚呼、宜なるかな。然るに、公の光明に於ける其の化導、倍豊にして、美を加えて即ち明らかなり。論主の黒谷に於ける其の立教、益備さにして、理を添えて、弥盛んなり。来際伝灯の懇念、誠に以て切切たり。故に論を造りて万世の下に伝う。字づけて『十勝論』と曰う。観ずれば夫れ、叙致簡要にして、論義深く博し。尊号を持つの体を極めて、淨教を詳らかにするの義を尽くせり。宜しく尋い閲ることを加うべし。

(336) 内外之縑細：「縑細」は書物の表装に用いる薄い絹。転じて書物を意味するが、ここでは仏典（内典）と仏典以外の典籍（外典）を指す。

(337) 虚心：心に何のわだかまりもないこと。

また、そうした心で物事に臨むさま。

(338) 翹勤：仏道修行につとめ励むこと。

迷盧：蘇迷盧の略。須弥山のこと。

(340) 罌土：「土罌」に同じ。積み重ねた石や土のこと。

(341) 捨受：快でも不快でもない感覚。

(342) 憫憐：「憐憫」に同じ。あわれむこと。情けをかけること。

(343) 開士：法を開示して衆生を導く士夫のこと。仏・菩薩の異称。ここでは澄円が六波羅蜜のうち、特に「檀（＝布施）」「忍（＝忍辱）」という二つの仏道修行に秀でた高僧であることを尊称している。

(344) 来際：未来際のこと。

若し之れを信順せる者は、歩歩に三悪の火坑を超越してん。若し之れを稟習せる者は、念念に九品の金台に遊びてん。闡揚の功、得て称すべからざる者か。小子、今囙らざるに此の論文を得て、以て長夜の灯炬と為す。肆に恭しく人法の靈徳を毘贊して、以て有道の碩才を睨論するのみ。

伝遮那大教兼天台円宗吽慶、謹みて跋す。

【実秀】

爽かに以れば、真如冲虚にして妙門玄寂なり。体量は六合八埏の外に出でて、形色は百非千是の域を絶す。爰に一切衆生等、背覚合塵せん自從り以降、未だ合覚背塵の要を知らず。

- (345) 三悪：三悪道・三悪趣の略。自らの悪業によって生まれる地獄・餓鬼・畜生と
いう三つの世界の総称。
(346) 稟習：習いいうけること。教えを稟受すること。
(347) 九品金台：極楽浄土に往生した者が坐す

- (348) 闡揚：道理や意義を明らかにすること。
(349) 毘贊：そばに付いて補佐する。
(350) 有道之碩才：仏道修行を實踐し、学徳共にすぐれた人。
る蓮台のこと。

- (351) 睨論：人を教えさすこと。ここでは、「十勝論」を他人に勧めること。
(352) 遮那大教：「遮那」は主に真言宗で用いる毘盧遮那（＝大日如来）の略。「大教」は仏の教えを意味するが、ここでは真言密教の教えを指す。
(353) 冲虚：とらえどころがないこと。
(354) 妙門：非常にすぐれた法門のこと。涅槃への入口。
(355) 玄寂：奥深くて静かなさま。
(356) 六合八埏：天地四方八方のこと。
(357) 百非千是：「百非」は固執した考えを打ち破るために、論理的に否定を繰り返すこと。『釈摩訶衍論勘注』には「百非千是皆拂迹入玄之意也」（正蔵六九、六七七中）とある。百非は永遠の否定、千是は永遠の肯定。空海「弁頭密二教論」に用いられる言葉。
(358) 背覚合塵：「背覚」は我々が本来有している悟りに目をそむけていること。このように悟りから目をそむけ欲望に合していること。
(359) 合覚背塵：「背覚合塵」の逆意。

所以に流転の故郷に玲峴れいげんして、愛海の長波に漂没し、生死の闇夜に迷妄まいたして、楚毒の險坑けんこうに墜墮す。是れを以て、法王、世に御して、慈悲の大雲を布き、大覺、機に応じて等流の甘雨を灑そそぎたまう。四生含靈しじょうくわんりやうの類をして九品淨刹の妙境に入らしめ、六趣有識りやくの徒をして三界無安の牢獄を出ださ俾しめんと欲して、牟尼むに薄伽はくかは忍土にんちに在まして往くことを勧む。弥陀尊者は安養に居いまして、導くことを致す。若し諸の有情有りて願王尊号の秘術を聞くことを得れば、業障の雲霧は忽まちに巻まきて、紫金の珍台は速やかに現あず。

抑おさ仏記ぶつぎを受けて釈教を闡揚するの賢者有り。其の名を澄上人と曰う。徳は内に光てり、行は外に施しす。夙熏しゆくくんに縁よらずして、多く生知を見るみる。神氣卓然しんきたくぜんとして、精彩異しやうさいに衆群に超えたり。風雲を繚つみ日月に負えり。測度凝邃そくたくぎやうすいして尤も酬酢しゆうそくに長ぜり。高会の席せきに陪そて、清談して日を終れども帰らんことを忘るるは、法喜

(360) 玲峴：よろめきながら進むこと。

(361) 迷妄：心の迷いのこと。

(362) 楚毒の險坑：苦しくて険しい穴。

(363) 四生含靈：「四生」は胎生・卵生・湿生・化生の四つ。生きとし生けるもの。

(364) 六趣有識：六道にいるすべての生類。

(365) 牟尼薄伽：「牟尼」は聖者や賢者、あるいは仏のこと。「薄伽」は「薄伽梵」の略で仏のこと。

(366) 忍土：この世のこと。娑婆世界のこと。

(367) 仏記：仏が弟子の未来について、あるいは果報について予言すること。別記、授記の意。

(368) ？：過去世の因縁にとらわれず、生まれながらにして道を悟っている様を見ることがある。

(369) 神氣卓然：不可思議な力が際だっていること。

(370) 測度凝邃：物事を推測して推し量り、それに向かつて深く努力すること。

(371) 酬酢：酒杯のやりとりのことで、転じて対応することの意。

食⁽⁷⁰⁾、五内⁽⁷¹⁾を資益するに由りて爾なり。止^ただ當時^た横しまに学者を撰得するのみに匪ず。兼て豎に万世の下を利せんが為に書を造りて世に発^たう。号して『浄土十勝論』と字づく。観ずれば夫れ、大聖に祖述して玄理を究極す。中葉の詞林を賽^とりて前修の筆海を酌む。善有れば要ず従う。之れ能く有れば必ず録す。之れ衆師の短を棄^すてて諸部の長を取る。大都^{おおむね}、一代衆典の旨^{めい}歸^{かへ}を総^すべ、四依群聖の靈府を指^くれり。一章に恒沙の義を含み、一句に竹葦^{ちくい}の理を蘊^つむ。学者、豈に甘露を服膺^{ふくよう}し、法橋^{ほふ}を頂戴せざるべけんや。現に観ずれば龍門の輩多く、斯の文に籍^よりて迷を曉^{さと}らん。之れを以て之れを詳^つらかにすれば、是れ究竟無余の巧説ならん。夫れ愚人、此の論を見れば、盲者の暗室の内に処^おり曉^{さと}する所無きが如し。智者、斯の典を披^ひけば、目有りて皎日^{きょうじつ}の前に処^おるが如し。何れの見ざらん所か。抑公^{おしこう}、当に此の隋珠^{ずいしゆ}を以て暉^{ひか}り上世に震うべし。胡^なに因りてか此の卞玉^{べんぎよく}を抱^かきて、乃^{いま}し末代に在るや。今、論主^{まのあた}、親^あり京師に遊びて、声^な、輦轂^{れんこく}に聞^きこゆ。緇流^{しりゅう}皆な其の判教分別の始めて盛んなることを嫉^{ねたみ}て、多く飛語^{ひご}を造りて

(372) 法喜食：食べ物を食べる喜びのように、教えを聞いて喜ぶこと。二食・五食のひとつ。

(373) 五内：心・肝・腎・肺・脾の五臓のこと。

(374) 旨歸：意義と結論。

(375) 四依：仏滅後に衆生が頼みとする四つのこと。四依には①行の四依、②法の四依、

(376) ③人の四依、④説の四依がある。

(377) 竹葦：原典は「葦」が竹冠。竹の名前。

(378) 服膺：心にとどめて忘れないようにすること。

(379) 法橋：仏法の比喩。

(380) 曉了：明らかにさること。

(381) 皎日：白く輝く太陽のこと。

(382) 隋珠：円形の珠寶のこと。

(383) 卞玉：磨けば名玉になる卞和の玉のこと。『韓非子』に説話あり。

(384) 輦轂：天子がのぼる車。

(385) 緇流：黒衣の僧侶達のこと。

(386) 飛語：根拠のないうわさのこと。

所立を誦る。是れ則ち、木、森林に秀でたる則んば、風、必ず摧く謂ならん。然るに螢火、光有れども、清涼の月光に及ばず。炬燵、闇を破れども、日輪の赫奕たるに如かず。故に終に使して、唾、自面を汚し、泥、己身に著れて悪声を四極に流し、謗罪を八獄に得たり。論主、衆口の謗を聞くと雖も、屹として転ばず、確として移らず。羸提、寔有るが故に、法水、年々に滂流して、四海に充塞し、伝持、日々に増盛して八荒に遠聞す。爰に小子、凶らざるに斯の典を獲りて、以て死生の述闇を照らすの夜光と為し、以て流転の困乏を救う宝珠と為す。肆に彼の恩山の一塵を酬いんが為に、褒詞を之の文尾に加う。

三部大阿闍梨実秀、謹みて摂州神咒寺の禅室に誌す。

【慧旭】

蓋し聞く、勝義不二の中には機根を離れ、教説を絶すと雖も、世俗森然の前には亦た因縁有り、設化有り。『浄土十勝論』の若

(386) 日輪赫奕：太陽がさかんに照っている様。「奕」は作字。

(387) 四極：四方の果てのこと。

(388) 屹：石の非常に堅い様子。

(389) 確：しっかりとかたまっている様子。

(390) 羸提：羸提波羅密。忍辱のこと。

(391) 滂流：盛んに流れ出ること。

(392) 神咒寺：兵庫県西宮市にある真言宗御室派の寺院のこと。山号は摩尼山という。

(393) 淳和天皇の妃如意尼が天長八年(八三二)に創建したと伝えられている。「じんじゅじ」ともいう。

(394) 勝義不二：勝義世俗不二のことで、最勝

真実の道理である勝義と世間通俗の慣

用が世俗が不一不異であること。真諦・

俗諦の二諦義を踏まえた解釈と思われる。

『仁王般若経』二諦品には、理から

いえば第一義諦と世諦の別があるが、

実には二諦は不二であるという(正蔵八

八二九上)下)。

きに至りては是れ遇すなわち有因縁の故に、亦た可得説のの者なり。觀
 ずれば夫れ始め「三学無分勝の」自り、終り「一帰不革勝の」に竟
 るまで、易行の徳能として之れを闡揚せざるは無く、難雜の過
 失として之れを挙出せずということ莫し。然らば則ち、二道の險
 夷い 皓皓こうこうたり。正雜の優劣、明明たり。誠に是れ学佛の輩の良
 導なり。抑そも亦た厭欣たぐの彙たいいの目足なる者をや。爰こに緇白しびやくの二
 弟子有り。覺律尊者は僧林の鸞鳳らんぼうなり。持名居士は儒家の達士
 なり。各序おのおのを為つくりて文の首しうぶに冠かんらしむ。覺公の「書契以来未
 夫惑ふく」の言、名公の「大法東漸具諸勝徳の」の歎とと同じく、以て
 一部三軸の玄旨を得て、一百箇篇の壺奥こんのうに達す。廬山大士の『智
 度論』に序するに齊しく、姚興皇帝が『積大衍論』の叙せしに同じ。

(394) 可得説：仏のさとりの世界は仏自身しか
 覺知することができず、衆生の言説で
 は説きあらわせない道理だが、仏にな
 る因の段階にある衆生のために、機根
 に応じて仏法が説きあらわされている
 こと。

(396) 一帰不革勝：『浄土十勝論』巻一四（第
 一一〇）を指す。
 (397) 闡揚：明らかにあらわすこと。
 (398) 二道之險夷：険しい土地と平らな土地
 ことでは難行道と易行道を指す。

(399) 皓皓：明るくはつきりしているさま。
 (400) 鸞鳳：神鳥の名。転じてすぐれた人、徳
 のある人。
 (401) 未惑夫然之言：俊覺律師による序文に「未
 或夫然之良墳矣」とある（『綜佛年報』
 三三二、三三三頁）。「惑」は「或」の誤記か。
 (402) 大法東漸具諸勝徳：持名居士による序文
 に「大教東漸以降教宗有如今之宗具
 諸之勝徳矣宗教乎とある（『綜佛年報』
 三三一、三三四頁）
 (403) 廬山大士：『積大衍論』：『続高僧伝』「慧遠
 伝」によれば、仏教の信仰に篤かった
 後秦の皇帝・姚興（二六六―四一六）は、
 羅什が訳した『大智度論』を廬山慧遠
 のもとに送り、序文を書くように要請
 したが、慧遠は老齢と体調の不良を理
 由として固辞した。慧遠は序文は書か
 なかったものの、後に熱心に『大智度論』
 百巻を研究して二十巻に抄し、後代の
 学者の理解を容易ならしめるために尽
 力したという（正蔵五〇・三六〇上―中）。
 また、唐中期以後に偽撰された『積摩
 訶衍論』には、姚興の作と伝えられる
 序文が付されている（正蔵三三・五九一―
 五九二中）。

斯れは是れ末学の指南、後進の食矩きくなり。孰れか之れを握翫あくがんせざる者か。

抑論おさむ主昇蓮社大徳和尚は余が法友なり。学は顕密を兼ね、才は内外に亘る。其の智識の深淺測り難し。宛かも大洋に臨むが如し。厥その才量の高下、弁わかえ叵まし。猶おし、蒼天を仰ぐに似たり。識量甚だ深高なるが故に、著述亦た邈遠ぼくえんなり。今、其の文義を解せんと欲するに、愚意ぐいの断甄だんけんの及ぶこと能わざる所なり。譬えば短極きよくの綆きようを以て深井の水を汲むが如し。然りと雖も、反覆して再びにして、三たびするに至りて粗ぼ素意すいを弁わかま。夫の文に華有りて而も儒林の奥を窮め、語に実有りて而も学樹の美を尽す。謂う所の第一の章は往生の機根を三学無分の異生に定め、第二の篇は即詣の正業を弥陀六字の尊号に決したり。此の解、大いに如来の本誓に符し、此の判は尤も高祖の玄文に合す。第三自り下は二章の枝末なり。寔まじに是れ絶倫の佳作なり。亦た即ち釈門の奇珍なり。随喜の至り、感激の余りに、恭しく弊文を綴りて其の書尾に題す。

(405) 矩：きまり、標準、法則のこと。

(406) 握翫：十分にあじわって読むこと。

(407) 邈遠：はるかに遠いこと。

(408) 愚意：性質の愚かなこと、才が明らかでないこと。

(409) 断甄：はつきり区別して理解すること。

(410) 以短極綆、深井之水：「綆」とは、つるべにつけて井戸の水を汲みあげる縄のこと。短いつるべなわでは深い井戸の水を汲むことはできないという、任務が重くて才能の足りないことのとどえ。

康永癸未、季春望日東山隱士慧旭、謹みて書す。

【良旭】

夫れ血氣有識は、必ず平等法界の性を具し、自体他身は定んで迷悟彼此の差無し。之れを開覚すれば早く二転の高台に遊び、之れに迷倒すれば毎に三有の淤泥に沈む。茲に困りて、弥陀世尊は五趣の塗炭を悲憫して、以て六八の宏願を發起す。牟尼薄伽は洪雷を驚嶺の雲に震い、法雨を沙界の内に灑ぐ。其の法雨宏願とは、三部の妙典是れなり。三部の所詮は、正しく語稱の一行に在り。其の妙行の機能を調わば、罪露を銷するの慧日、業繫を斬るの神劍なり。算数に未だ其の際を数えること能わず。故に不可思議の語を宣て、以て之れを歎ず。一子も尚お其の心を顕すに足らず。故に甚だ父母の諭を挙げて、以て之れを明かす。迦葉尊者は、慶喜大徳に伝受せし従り以往、師資相付、今に迄るまで絶えず。爰こに淨公大徳有り。群品を永夜に悲し

- (423) 群品…さまざまな機根の衆生のこと。
- (422) 慶喜大徳…阿難尊者のこと。十大弟子の一人で多聞第一とされる。
- (421) 迦葉尊者…摩訶迦葉のこと。積尊十大弟子の一人で頭陀(食行)第一とされる。
- (420) 慧日…仏の智慧の廣大無辺の様を太陽の光に贈えたもの。
- (419) 語稱…称名念仏のこと。
- (418) 沙界…恒河沙世界のこと。
- (417) 驚嶺…靈鷲山のこと。
- (416) 牟尼薄伽…共に仏の尊称。
- (415) 五趣之塗炭…五悪趣のこと。泥にまみれ、火に焼かれるような極めて苦痛な境遇。
- (414) 三有之淤泥…三界における苦に塗れた衆生のあり様。
- (413) 二転…煩惱障と所知障を転じてこの上ない悟りを得ること。
- (412) 血氣有識…血がかよい、意識作用を持つもの。衆生のこと。
- (411) 康永癸未…康永二年(二三四三)のこと。

み、異生(424)を昏衢(425)に済(426)う。三八の弘誓(427)を弘(428)むるに九流を以てし、三字の尊号(429)を助くるに五乘(430)を以てす。斯れ則ち大士の経営する所、少人の意(431)ざる所なり。調つべし、是れ四依の随一、千仏の一体化なりと。爰(432)れを以て、天將に論主を以て、淨門の木鐸(433)と為さんとす。夫の求めて以て名位を得る者と、何ぞ其れ同日にして以て語るべけんや。加之(434)、天縦(435)の奇材、自得の妙術、外に著して掩(436)うべからざるは一に非ず。中に秘して量るべからざる者はれ多し。若し人をして、法を一にし、同じくせしめんと欲せば、何ぞ埏阜(437)と安明(438)と共にして高さを等しくし、螢燭(439)と日月と照を齊(440)しくせんに異らん。然るに万世の下を利せんが為に、言を筆にして書を成す。其の名を『十勝論』と曰う。觀(441)ずれば夫れ、法義幽邃(442)にして妙旨(443)冲玄(444)なり。浅智の能く識る所に非ず。聽弁(445)も豈に測量せんや。寔(446)に是れ生死の大海を超越るの靈翼(447)なり。抑亦(448)た涅槃の大虚(449)に翔(450)るの聖翮(451)なり。然りと離も、筆舌弁才(452)に於ては即

(424) 異生：凡夫のこと。

(425) 三八弘誓：六八の誤りか。

(426) 三字尊号：阿弥陀の三字のこと。

(427) 五乘：人乘、天乘、声聞乘、縁覺乘、菩薩乘の五つ。

(428) 天將以論門之木鐸：『論語』に「儀封人請見、曰、君子之至於斯地、吾未嘗不得見也、從者見之、出日、二三子何患者於喪乎、天下之無道也久矣、天將以夫子為木鐸」とある。ここでは、封人の言葉を借りて、天が孔子に魯での地位を失わせて人々を覺醒させて、後世に教えを垂れる使命を果たさせようとしていることを述べている。

(429) 天縦：天命のまま。

(430) 提：小高い山のこと。

(431) 安明：ヒマラヤ山のこと。

(432) 螢燭：かすかな光のこと。

(433) 聽弁：賢くて弁才があること。

(434) 聖翮：聖なる羽のこと。

競いて僕隸ぼくれいの誼ぎを存し、他家の高識、争いて門役の礼を資とる。僕役するの彙たくい、皆な虚往実帰きょくわじつじきの徳有るのみ。大凡おおよそ公は意に弘経を存し、口に微辞びじ多し。口に微辞多しとは、師に学べる所なり。意に弘経を存することは仏に伝うる所なり。法を示すとき、設い無念と雖も、皆な実理に応かなう。譬たとえば善射ぜんしやうの人の如く、又た劍客の舞に似たり。三輪さんりん齊く驚き、七衆しちしゆ同く帰す。其の設てい化けを視聴するに、一乗いちじやうの円宗えんしゆを清旦しやうたんに揚あぐること巍巍ゑゐたり。九品の真宗しんしゆを中辰ちゆうしんに談じて蕩蕩たうたうたり。説詞、既に清靡せいびにして理亦た高華かうかなり。時の人、之れを一切経蔵と号し、之れを迦旃延かせんねん尊そんと称す。古いにしへに云く、国に忠良有れば四夷手しよゐを拱こまぎ、八表はつへう来降らいかうすと。此れは仏家に論主有りて、六合垂拱りくくわくして円宗えんしゆの秘蹟ひさくを温たづね、八極はつごく来集らいじつして、別願の玄旨げんしを学まなぶを謂いうか。

- (446) 僕隸…しもべの意。
 (447) 誼…よしとするとするところの意。
 (448) 虚往実帰…行くときは何も分からず空つ

- (449) 微辞…かすかにほのめかすこと。
 ぼの状態だが、帰るときには充実して満足している意から、転じて、師などから無形の感化や徳化をうけること。

- (450) 善射…上手に弓を射ること。
 (451) 三輪…身、口、意の三業のこと。
 (452) 七衆…仏教徒集団を構成する七種類の人々のことで、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、沙弥、沙弥尼、式叉摩那のこと。
 (453) 一乗円宗…天台宗のこと。
 (454) 清旦…夜明け。静かですがすがしい朝。
 (455) 中辰…「中辰」で天子の宮殿のこと。
 (456) 蕩蕩…広くいきわたる様子。
 (457) 清靡…清らかなになびくこと。
 (458) 迦旃延尊…本名那羅陀。釈迦十大弟子のひとつりで議論第一と称される。
 (459) 忠良…真心があつて善良な人のこと。
 (460) 四夷…周囲の国々のこと。
 (461) 八表…八方の遠いはずのこと。
 (462) 六合…天地四方のこと。「実秀」の註参照
 (463) 垂拱…たもとをたらし、腕を組んでするあいさつのこと。
 (464) 八極…八方のはて。転じて全世界をいう。

抑おもしろ亦た止ただ横に大法を闡揚するのみに匪なず。亦た兼て万世の下を益すが為に『十勝論』一百余篇を著して、以て六八教の微妙の玄極を成ぜり。所謂、高壙こうう崇たかく映し、天網遐よほかに張り、真俗の宗帰を統べ、事理の極致を究む。華筆ふんぶく芬馥ふんぷくして義熏維ごれ遠く、文簡なれども理豊かなり。辞弁しべん曲雅くうがにして後に伝うるに足れり。且おもしろく意みるに、公は、鷲嶺じゆりやうに受けて重ねて伝持するの故に仏の仏に会し、黒谷くろこに継いで再び守文しうぶんするの故に仁の仁に当たる。法位ほふゐを四祖しそに嗣ついでぎ、血脉けつぱくを空公くうこうに稟うけること、寔まことに以有ゆゑるかな。然るに曲高くして和寡わくわなし。故に入室昇堂にゅうしつしやうたう、蓋し希まれれなり。爰こゝに世人よじん多く庸才ようさいの自量じりやうを以て、論主の大道だうだうを測る。那なんぞ、裳もろそを倒さかさまにして領えりを索さがして身みを曲まげて影なごの直なきを求めもとめるに異ちがならん。又た將まさに土つちを捧たもげて、以て孟津もうしんを塞ふさがんとし、斧きを運めらして以て隆車りやうしやを覆おほさんと欲ほするに相同おなじし、豈いかに果はして得えべけんや。亦た乃すなはち轅えんえを北きたにして越えつに適あくふの士しなり。安やすんぞ之これれと与ともに道みちを論ろんずることを得えんや。

抑おもしろ小子、夫の伝法の微言を聞き、此の造論の大功を想おもうに、

- (465) 高壙…高い城壁のこと。
 (466) 芬馥…かくわしい香りの盛んな様子。
 (467) 辞弁…巧みに連ねた言葉のこと。
 (468) 鷲嶺…靈鷲山のこと。ここでは釈尊を指す。
 (469) 黒谷…ここでは法然を指す。
 (470) 守文…昔から伝わることを守ること。
 (471) 四祖…弥陀・釈尊・善導・法然のこと。『諸宗根本勝』一二巻に詳しい。『十勝論』下巻一四丁ウ参照のこと。
 (472) 空公…源空のこと。
 (473) 庸才…非凡な才能のこと。
 (474) 孟津…黄河の渡し場の名前。
 (475) 隆車…大きく高い車、勢いよく走る車のこと。
 (476) 北轅適越…遠く中国に渡ったこと。

欽仰きんぎょうからず。帰依きぎ惟れ重し。故に謹んで其の徳を歎ず。但し短筆たんぴつの毘贊ひさん、其の底を窮むること莫し。此の余は併しかしまがら来哲らいてつに貽のこすのみ。

三部大阿闍梨、権大僧都長嚴九拜して書す。

【快実】

夫れ覺月已に没して明光いひしを古えの虚そらに慕う。龍華りゅうわ未だ萌きざさず。開発かいふつを孰れの春にか待たん。此の時に於て尤も学ぶべき者は、是れ真宗の一門なり。専ら勤むべき者は、迺すなわち専修の妙行なるのみ。爰こゝに拔萃ばつすいの大宗師有り。厥の号を浄公上人と曰う。言を立てて人を利し、論を造りて世に行ず。其の述作の為体は衆典に狎な渉し、群雄ぐんゆうに徧詢す。或は一勝を聞く則すなわば之れを心腑しんぷに銘じ、或は一文を得る、則すなわば之れを竹簡てつかんに編じて、総じて一百箇篇ひゃくかへんを成ず。撰述せんじゆつ懇懇こんこんなるが故に見聞の皂白そうはく皆な之れを信敬しんけいす。抑此そもそもの典の中に多く顕密けんみつ釈教の明文めいぶんを援ひき、孔老外書こうらうがいしよの事跡じよじゆつを載のりて往むか往むかなり。学者其の源流げんりゆうを知らずして妄りに臆説おくせつ推量すいりやうを為して皆な以て

(477) 欽仰：尊敬すること。

(478) 短筆之毘贊：この自らの跋文のこと。

(479) 拔萃：拔粹の意。多くのものの中でとびぬけてすぐれていること。

僻説せり。所以に論主自ら末書を為りて以て本文を銷して庸愚の迷亂を却く。故に學者渙然として水積す。夫れ元戎の節度は光を堯天に輝かし、十勝の靈威は化を舜土に布く。然るに当代多く菽麥致迷の輩有りて詐り親みて、以て公が智識の深淺を謀らんと欲す。忝いかな。豈に鬪狗の狗を襲い、狐豚の虎を免るべしと有らんや。小子論文を得て以て其の意を看取す。茲れに因りて別願の玄邃を信じ、往生の用心を堅む。

皆に康永旃蒙、作罽の祀、大族初八の日。沙門快実謹みて題す。

【重澄】

夫れ真理本寂の中に迷悟の仮名忽に絶し、中道随縁の前には淨穢の身器速かに形る。爰こに弥陀慈父は淨刹に在て、以て其の欣求の人を招き、能仁悲母は穢方に現じて、以て其の厭離の心を激す。寔に是れ爺孃の悲憫か。抑亦た郢匠の遣迎か。得て思議すべからざる者なり。能仁激勸の言、廣く一代に通亘すと雖も、大悲窮極の訓は局て三部に在る者なり。倩三部教王の大都を案

(480) 渙然…とけ散るさま。

(481) 元戎節度…天子が將帥に出征を命ずる際、その符節として賜る太刀や旗のこと。

(482) 堯天…舜土と対句。堯・舜は共に理想的な帝王の名であり、天と土と組み合わせて理想的な世の中のことを意味している。

(483) 菽麥…豆と麦のこと。

(484) 鬪狗…ハツカネズミのこと。

(485) 康永旃蒙作罽之祀大族…康永四年(一三四五)乙酉の一月八日のこと。「旃蒙」とは十千の乙の異称、「作罽」は西のこと、「大族」は一月の別称。

(486) 能仁…よく導く人の意で、ここでは釈尊のこと。

(487) 郢匠…『莊子』の故事で、「郢」は郢人、「匠」は巧匠で、この釈尊と阿弥陀仏の善巧を例えたもの。善導『觀經疏』『華座觀』の部分には「斯乃二尊許應無異。直以隱顯有殊。正由器朴之類萬差。致使互爲郢匠。」(浄全二・四四上)として使用され、良忠『伝通記』には、『莊子』に説かれる巧匠が郢人の鼻の先に塗った土を斧で落とした故事があげられている。

ずるに、唯だ逆謗の群類に被らしめて、全く大小の聖人の于^ため^にせ、
 爰^{こゝ}に如来の附属を奉て真旦に降誕するの^大士^有り。京師光明の
 導^導公上人是れなり。嗚呼、宜^{むべ}なる哉。神徳風霜に邁^すぎ、禪那淵海
 を鑑とす。初めは化益を京輦^{きやうれん}に施して、而して王侯卿相に宗^{たど}え
 後には行跡を終南に暗くして、而して流に漱^{くわす}き、石を枕として
 篤^{とく}懇^{こん}す。然ば則ち高卑皆な恩を恋う宛も走獸の驕^{かう}驕^{かう}を貪^あるが如
 く、皂白^{そうはく}悉く徳を慕う。猶し飛禽^{ひきん}の鳳鸞^{ほうらん}を追うに似たり。克^{よく}
 人は一代に利あり、万世を益するの理に達して、深く摩得^{まなろき}勒迦^{りやく}
 昧^{まい}に入て、聖僧指授の壺^こ邃^{すい}を録す。其の典の為^て体^{たい}く法舟^{ほふしゆ}を苦海
 に運び、夷途^{いとう}を火宅^{たいちやく}に坦^{たい}て三心を詳勘し、六字を激勸することの
 廣きこと百家の逮^おわざる所なり。諸哲も之れに比すること莫し。
 但^ただ神^{たまし}を窮^{きゆう}め、化を知る。其の言宏大にして驚くべし。疑^{しり}を黜^{せつ}
 慮^りいを絶つ。厥^あの軌清遼^{あどせいばく}にして蹈^ふみ難し。華夷の皂白朝野の尊
 卑、各に附て安ずる所に此の論の義味^なを嘗^なること鮮^{すく}し。研精して
 以て章目の深玄を考え、沈吟して以て文中の起尽を察するに非ざ

(488) 驕驕：良馬の名。周の穆王の八駿の一つ
 で赤栗毛の馬のこと。

(489) 飛禽鳳鸞：「飛禽」は空を飛ぶとりの通称。
 「鳳鸞」は神の鳥で、赤い色の鳥を「鳳」、
 青い鳥を「鸞」と称された。ここでは
 空を飛ぶ鳳凰を追いかけけるようなもの
 という意で、無謀なことのたとえとし
 て用いられている。

(490) 摩得勒迦三昧：『翻訳名義集』によると、
 「摩得勒伽。此云智母。以生智故。菩
 薩入此三昧作論申經。儒家以析理精微
 名論（…中略…）釋氏申通辨論宗旨。收
 束所説。立爲十支。一略陳名數支。即
 百法論。二粗釋體義支。即五蘊論。此
 二天親所造。」（正蔵五四・二一・三下）
 一一・四七）とあり、菩薩がこの三昧に
 入ると「論」を作り、「経」まで説くこ
 とができるという。深い学徳を得たと
 という境地を、この境地に例えたと考え
 られる。

(491) 清遼：高遠な姿のこと。

る自りは、以て匪石の信根を立て漆桶の疑惑を去くること無けん。於戲、宜なる哉。縦い千鈞の黄金なりと雖も、未だ其の視ることを驚かすに足らず。縦い八種の妙音なりと雖も、其の聴くことを改むること能わず。之れを聞くこと博して楽うこと愈深く、之れを思うこと深くして信ずること弥篤し。皆な罷んと欲すれども能わず。則ち其れ妄に非ざること必せり。爰ここに尊公尊師の法孫有り。其の名を円大徳と曰う。神識安閑にして形容審定なり。能く神明の妙理に合して天地の精醇に同じ。宇内の黎元を育つて域中の群有を和ぐ。為人、任堪を以て力とし、鑽仰を以て業とす。去し建武兵革の時、赤眉の難に罹て、赤裸裸として五夜を曙し、食飲絶えて三日を暮しぬ。然と雖も矻乎として稽古し、確乎として述作す。

峩に寒風竹を破り素雪簷に積む人、艱辛を訪うに答て曰く「忍辱を以て衣と為るが故に嚴寒膚に納らず、法喜を以て糞と為る

(492) 匪石之心根：「匪石」は石に非ずの意で、

石ころのように転がることがないこと、

うこと例え。ここでは「匪石之心根」として、転がり揺らぐことのない心、

(493) 固く揺るぎのない信心を例えた語。

漆桶の疑惑：「漆桶」は漆を入れた桶のこと、真つ黒なものという意。また、仏教において「何の智恵もない者」を例えることもあるというが、ここでは「漆桶の疑惑」として真つ黒な疑惑、根深い疑いの心を例えたものと考えられる。

(494) 黎元：全ての人々のこと。

(495) 群有：万物のこと。

(496) 建武兵革：一三三六年（建武三）二月二九日に南朝方が兵革（戦）を理由として元号を「延元」と改めたこと。しかし足利方の北朝はこれを認めなかった。

(497) 赤眉の難：中国の新末後漢初に起った農民を中心とする内乱のことだと思われるが、ここでは日本の南北朝期の内乱を例えたものか。

(498) 艱辛：悩み苦しみのこと。

(499) 糞：糞の字と同義で、食べ物・飲み物のこと。

が故に、飢渴心を悩さず」と。此の言誠なるかな。観れば勢力勇健にして容色儼然たり。嗟乎、尼父の四謗に遭いて弦歌せしと、大徳の賊難に離て鑽述せしと、孰与や。凡そ教法を輯纂して前判を明決し、後滞を開発すること維れ多し。則ち『驚覚論』、『松風論』、『浄土五祖弁』、同末書、『浄土諸祖系図』、同『光彩論』、『愚問賢答集』、『蜀道論』、『琢磨鈔』、『呂律集』、『二論問答集』、『浄土諸流縁起集』、『二道対弁論』、『二愚一賢集』、『釈門息諍論』、『知恩報恩集』、『親近知識集』、『破邪顕正論』、『能断金剛集』、『浄土十勝論』等一百軸に幾く、盛に世に行ず。中に於て文を極め、理を窮め、筆を尽して詞を尽せるは正く是れ此の十勝のみなり。

討尋の彙、英明に非ざれば悟ること莫けん。承領の輩、行位に非れば胡ぞ知らんや。且然に有人、眉を嘖めて曰く、小子此の論を得て文を明かして義を取らんと欲するに、其の文解し巨く、厥の義領し難し。頗る是れ要無しかと。余が曰く、井の蛙巨海を知らず、鷓鴣蒼天に翔けずと言うは、仁者が小量を謂うか。而聞け、吾れ語らん。

(500) 尼父：孔子のこと。

(501) 四謗：孔子が魯・衛・宋・蔡の四国を追われたこと。（『莊子』漁父篇）

(502) 鷓鴣：スズメ目ミソサザイ科の鳥。全長約十センチで日本産で最小の鳥。春にさえずる。

(503) 且く『牟子』⁽⁵⁰⁾が曰く、至味は衆口に合わず。大音は衆耳に比せず。咸池⁽⁵¹⁾を作し、大章を設け、簫韶⁽⁵²⁾を発し、九成を詠するときんば、之れに和するもの莫し。鄭衛の絃⁽⁵³⁾を張り、時俗の音を歌えば、必ず期せずして手を拊⁽⁵⁴⁾つ。故に宋玉⁽⁵⁵⁾が云く、「客、郢⁽⁵⁶⁾に歌いて下俚⁽⁵⁷⁾の曲を為すに、和する者千人。商を引きて角を激するときんば、衆之れに応ずるもの莫し」と。此れ皆邪声を悦びて大度を暁⁽⁵⁸⁾らざる者なり。韓非⁽⁵⁹⁾が管闔⁽⁶⁰⁾の見を以て堯舜を誇り、接輿⁽⁶¹⁾が毛嫱⁽⁶²⁾の分を以て仲尼⁽⁶³⁾を刺⁽⁶⁴⁾る。皆小に耽⁽⁶⁵⁾りて大を忽⁽⁶⁶⁾にする者なり。夫れ清商を聞きて之れを角と謂⁽⁶⁷⁾うは、弾絃の過に非ず、聴く者の聡ならざるなり。和璧を見て之れを石と名づくるは、璧の賤しきに非ず、視る者の明ならざるなり。神蛇能く断じて後続けども、人をして断ぜざらしむること能わず。靈龜夢を宋元に発すれども豫且⁽⁶⁸⁾

牟子…一巻、牟融撰。後漢の成立。具名を『牟子理惑』といい、『理惑論』ともいう。『隋書経籍志』の儒家類、『唐書芸文志』の道家類に取り上げられてい

(504) 咸池…堯の時代に用いられた音楽の名前。
 る。清の孫星衍が『求明集』に見られるものを抽出して一巻とし、これが『百子全書』に収められている。

(505) 発簫韶詠九成…簫韶の樂を九回演奏すること。成は樂曲の一終。出典は『漢書』で同文あり。

(506) 鄭衛之絃…みだらな音楽を奏でること、もしくはその準備をすること。古代中国において、鄭と衛の国はみだらな音楽を奏でること有名であったとされる。

(507) 宋玉…楚の人で、屈原の弟子。楚の大夫という官位についていた。師の屈原が迫害されたことに悲しんで九辨と招根を作った。

(508) 接輿…楚の狂人。孔子が政治にかかわったのに対し、接輿は狂人のふりをして政治に関わらなかった。

(509) 聞清商而謂之角…五音(宮・商・角・徵・羽)は清・濁・高・下によって分けられる。ここでは「清商」を「角」と聞き間違えたということ。

(510) 和璧而名之不明矣…『韓非子』和氏からの引用。

(511) 神蛇能断人不断也…『淮南子』説山訓からの引用。

(512) 豫且…春秋時代の宋国の漁人。

の網を免るること能わず。道は無為にして俗の見る所に非ず。誉る者の為に貴からず、毀る者の為に賤からず。用と不用とは自ずから天なり。行と不行とは乃ち時なり。信と不信とは其れ命なり。⁽⁵¹⁴⁾

今具に之を聞かば、汝が己を測るの難、自ら恥慚せん者か且く自量せよ。自量せよといえ、問者服膺して却きぬ。抑夫の玄奘三蔵自翻の般若に於て御製の序を請い、咸耀書記所撰の義海を携て惟心の題跋を求めんの例に準じて、論主自ら十勝三軸を送りて以て跋文を請う。只貴命を重することを知りて短筆を顧みず、敬て其の末に書して以て之に帰す。皆に貞和第二、柔兆隆婁、季春十五日の日、朝議即源重澄謹て題す。

- (513) 不為譽者、為毀者賤……ここは「譽を為さざる者は貴し、毀を為さざる者は賤し」と訓ずべきか。
- (514) 用与不用、信其命也……『弘明集』(正藏

- 五二・五中)からの引用。
自量、自量矣……ここは「自量せよ自量せよ」と訓ずべきか。

- (516) 服膺：心にとどめて忘れないようにすること。

- (517) 抑準夫玄、請御製序：玄奘が自ら翻訳した經典や論書に対して、その序分を唐の太宗に請うたというできごとで、『弘明集』巻第二に玄奘の「御製三蔵聖教の序を請う表」(正藏五二・二五八七)や、太宗の「玄奘法師の前表に答うる敕」などが収められている。ここではこのできごとになぞらえて、澄円が重澄に序の執筆を請うたとしている。

- (518) 咸耀書記、題跋之例：咸耀が記した書物を惟心のもとに届け、題跋を請うたという故事を例として用いたようだが、咸耀と惟心が何者か判明せず、惟心は恐らく『翻訳名義集』の序を書いた唯心宗葵のことかと思われるが、はっきりとはしない。

- (519) 貞和第二：日本の南北朝期の北朝方の元号で一三四六年。

- (520) 柔兆隆婁……「柔兆」は十干の内別称。「隆婁」は「降婁」の誤りか。十二次の「降婁」は戊の別称。

- (521) 朝議即……寛文三年版によれば「朝議郎」。「朝議郎」は唐代の官職で正六位下。

【寂然】

仏教は沖玄ちゆうげんにして天人も測ること莫し。本を言えば則ち甚深なり。門を語らえば則ち難入なり。然るに大聖悲憐して訓おしえて安養に帰せしめたまう。是れ則ち易往いおうの捷徑しょうけい、易入いにゅうの要門ようもんなり。厥しよけいの捷徑しょうけいを示し其の要門を指すは即ち是れ『浄土十勝』のみ。此の宝典は是れ鷺鳥じゆちようの中の一鶚いちかくか。衆星の間の一月か。抑論おpresso主浄公大徳は智識弘毅ちしきくわうぎにして学者の倚頼いらいたり。横目おうもくの蒼生そうせいを意おもうて白浄はくじやうの大法だいぽうを宣ぶ。凡そ公の弁論を聞くの人は邴邴乎へいへいことして其れ喜べるに似たり。

公恭しく宣尼せんじの三徳さんとくを慕もうて自らの徳と為し、孔丘の四憂しよいうを傲ないて己が憂と為して、二道にだう俱くに学び、義理懸ぎりけんかに通ず。然れども真宗に於いて尤も其の玄極げんごくを善くす。年を追おいて慧解えげ愈いよいよ高く、博く古今に達せり。所以ゆえに萑葦かんいせん蒹葭けんかの疏談くさたんを芸うりて、以て稲麦黍稷いんぼうしよしよくの妙玄めうげんを生なず。文華、松行に熏じ、学月、心靈を照らす。

(522) 沖玄：奥深いこと。

(523) 要門：極樂浄土に入る肝要の門。

(524) 一鶚：偉大な鷺の中でも鶚のように特に優れたものこと。

(525) 智識弘毅：博学多識、知識が広い。

(526) 倚頼：学ぶものの頼りとするところ。

(527) 蒼生：世の人々、人の目は横についていることから横目という。

(528) 白浄大法：清らかな教え。ここでは浄土往生の教えのこと。

(529) 邴邴乎：よろこぶさま。

(530) 宣尼：孔子のこと。名は丘、字は仲尼。また漢の平帝が孔子に褒成宣尼公と追諡した。

(531) 三徳：孔子が掲げた三つの徳。『中庸』によれば智・仁・勇。

(532) 四憂：孔子が魯・衛・宋・蔡の四国を追われたこと。

(533) 二道：儒教と仏教。

(534) 萑葦蒹葭：「おぎ」「あし」のように実の乏しい議論を雑ぎ払うこと。

(535) 稲麦黍稷を生ず：「いね」「むぎ」など五穀のように実のある奥深い道理を説き明かすこと。

老婆心を以て一論を著して、三際を益す。

其の爲体や、咸く経論を約して真宗を演暢す。亦た猶し群玉を荆山に集め、百川を溟海に約するがごとし。寔に以て絶妙なりと爲す。然るに人皆な論文を読みて義趣に滯す。是れ則ち、大声、里耳に入らず、高言、衆心に止まらざるの謂なり。

凡そ公の道は重玄に冠らしめ、独り方外に超えたり。問者、言弁宏博なりと雖も口呿けて合せず、舌挙げて下らず、乃ち逸げ走る。子公或る時、試みに諸方の学徒に命じて、此の論を披講せしむるに、皆な文法に迷い、悉く深旨を失して繆解し錯論す。猶し大匠に代わりて劉るに其の手を傷くるがごとく、香象の負う所、牛力の堪うる所に非ず、騏驎の走る所、驚駘の及ざるに似たり。当時の滞在を見て豫め将来の致迷を知る。故に清涼国師の旧蹤に任せて自ら本論の壅滞を決して、以て学者の信水を澄すのみ。

小子此の論を得て、初めて安養の捷徑を知る。故に恭く跋を為して洪恩を謝す。

(536) 三際：過去・現在・未来の三世。

(537) 群玉をくごとし：すぐれたものを集めること。これは荆山で玉を集め、海に百川を集めることに例えている。

(538) 大声里く謂なり：深遠な道理は俗人には理解されないこと。『莊子』天地篇にある。

(539) 重玄：きわめて奥深いこと。
方外：世俗を超越したところ。

(540) 驚馬：歩みの遅い馬。オの劣る者のたとえ。

(542) 清涼国師：華嚴宗第四祖澄観（七三八～八三九）のこと。元和五年（八一〇）に大統清涼国師と加賜される。『八十華嚴』の註釈書である『華嚴経疏』六〇巻を著すが、弟子の要望に応じて新たに『随疏演義鈔』九〇巻を著した。この故事に倣って、ここでは澄円が『十勝論』に続いて、『輔助義』を和文で著したとされている。

時に貞和強圉、陬訾の歳、夾鐘三五の日、金剛仏子寂然序す。

【妙快】

夫れ三部の教王は是れ竺乾の洪範なり。九軸の妙文は迺ち支那の宝典なり。昔、能仁氏出でて千界に震い、独り三界に主として四生の汨没を觀じて、濟うに別意の教綱を張設し、群品の致迷を憫みて、恵むに司南の大輅を施与す。凡そ流轉五道には癡愛を本と為し、超越二死には唱念を宗と為す。厥の唱念の源は、則ち因位の大願是れなり。若し信敬受持すること有る者は則ち世の津梁と作り、若し毀訕誹謗すること有る者は則ち泥梨の囚と為る。

抑 円公大士は二尊の密意を顕示せんが為に、故らに『論』を作る。『論』文を尽くし、理を尽くすが故に、以て前疑を開き、而も後滞を決り、四霧を披いて、而も三景を觀つべし。夫れ論主は名翼、天に飛び、徳風、率土に靡かす。其の智識、測り叵し。

(543) 陬訾の歳：光明天皇（北朝）貞和丁亥三年（一三四七）。

(544) 夾鐘三五の日：陰曆二月一日。

(545) 九軸の妙文：善導「五部九卷」を指す。

(546) 能仁氏：釈尊のこと。

(547) 四生の汨没：四生とは胎生・卵生・湿生・化生の四種、汨没とは水中に沈むこと、ここでは生きとし生けるものが輪廻することを指す。

(548) 司南の大輅：司南とは指南と同義、大輅とは天子の乗る車のこと。

(549) 癡愛：心の暗い愚かさと言りのことで、三毒のうちの愚癡と貪愛を指す。

(550) 超越二死：二死とは分段生死（一定の際限がある三界内の生死）、變易生死（菩薩らが自在に変化改易できる生死）のこと。三界の内外においても、称名によつて往生できるとされる。

(551) 津梁：河を渡る筏のこと。

(552) 泥梨：地獄のこと。

(553) 率土：海沿いの地方、辺境の地という意味から、転じて全土のこと。

注げども満たず、酌めども竭きず。窃窃焉たり、芒芒焉たるの
 人に対しても、猶お賓賓として問ひ学ぶや。故に細流聚めて巨
 海と為り、土壤積みて泰山と為る。以みれば、巨海の洪波は湯
 湯兮として蒼天に弥り、太山の巔嶽は嶻嶭兮として九空に隣
 る。故に群英、夫子を覩て、皆な云う。嘻ぐも学山の竜象なり。
 請う、足下を礼して、以て師資の礼を資らんと。夫れ子公は身心
 を刻勵し、其の行を高尚にし、世俗に離異して卓爾として群ぜず。
 妙雲牟尼の外教を高論し、光明黒谷の遺風を清談す。樂智は上
 聖旨に契い、下物機に合うて、而も誤り無きこと、猶し御寇の
 射術のごとく、又た鸞鑑の物を照らすに似たり。尤も至人と謂
 いつべし。

抑『論』文益多し。故に有道の緇白、皆な序跋を為りて、以
 て之れを毘贊す。其の文詞、華麗にして霞のごとくに煥り、錦
 のごとくに舒べて、褒揚の美を極め、讚歎の誠を尽くす。

爰に小子、庸才を顧みず、跋文を書きて来縁を結ぶ。高識の人、
 訕りを致すこと莫れ。

- (567) 窃窃焉：声をひそめて話すさま。
 (554) 芒芒焉：ぼんやりとしているさま。
 (555) 賓賓：かしまつてつとめるさま。
 (556) 湯湯兮：河や波が早く流れる様
 (557) 巔嶽：「巔」「嶽」はともに高い山、頂
 (558) のこと。
 (559) 嶻嶭兮：山の高くけわしい様子。
 (560) 嘻ぐ：喜び嘆息するさま。
 (561) 竜象：『綜佛年報』三二、一四七頁、註
 (562) 二〇。
 (562) 妙雲牟尼：竜樹を指す。竜樹の本地が妙
 雲相仏とされる。
 (563) 光明黒谷：善導・法然を指す。
 (564) 御寇：「御」は「禦」に通じる。外敵を
 防ぐこと。
 (565) 鸞鑑：鸞鏡のこと。鸞鳥を背に彫った立
 派な鏡。
 (566) 至人：十分に道を修めてその極致に達し
 た人のこと。
 (567) 毘贊：そばに付いて補佐する。

岬、貞和箸雍困敦南呂初三の日、沙門妙快、謹んで題す。

【実信】

夫れ至理名を絶す。彊いて無為中道の称を立つ。大極生を離
れたれども、仮に彼此去来の生有り。厥の無為の中に尤も奇絶特
妙なるは、是れ極楽の無為なり。其の死生の中に殊に最尊第一な
るは、迺ち安養の往生なり。

抑 毘提夫人禁閉の難に遭うに因て、釈迦能仁之れが為に淨
土の門を開く。此の中に三摩鉢提の深要有り。箇の裏に六字尊
号の妙行有り。抑或は晨丹、或は日本、神僧大士詮詮の者、数
測るべからず。鉅公名儒誦持の彙、籌も能く筭すること莫し。
然りと雖ども随自随他の差降を弁ぜず。本誓非願の高卑を論ぜ
ず。妄りに情に任せて行を取る。是れ則ち只弥陀六八の玄極を失
するのみに非ず。亦大に能仁付属の明詔に背く者なり。孰れか
卓犖拔萃の智人と云んや。爰に吾宗の高祖逞しく両三摩鉢提の
優劣を明し、快く正雜二行の殿最を示す。寔に是れ判教の故質

(568) 南呂：貞和戊子（二三四八）陰曆八月。

(569) 至理：最高の理り。

(570) 大極：中国の宇宙観で、もつとも根本となるもの。

(571) 毘提夫人禁閉の難：『観経』に説かれる韋提希夫人幽閉のこと。毘提は韋提希の異訳。

(572) 三摩鉢提：三摩跋提・三摩鉢底と同じ。精神統一によって心が安らかになった状態をいう。

(573) 鉅公名儒：偉大な人や名高い儒者。
(574) 能仁付属の明詔：ここでは『観経』末尾に説かれる阿難への念仏の付属を指すと思われる。

(575) 卓犖：この上なく優れているさま。
(576) 吾宗の高祖：善導大師のこと。

に協ない、立宗の骨法を得たまえる者か。故に四方皆之を握玩し、八極同じく之を珍敬す。誰か帰せざるの者か。

然に導公上人異代の門役有り。淨公大徳と名づく。道三清に邁ゆぎ、神六合に遊んで、徧く名師に諮はかりて旁秘藏かたがたを求む。梯航し既に具して、壺輿こんぎやう必ず臻いたる。凡そ徳宇凝精にして、神鋒爽拔なり。持念の余暇を以て、筆を下して章を成し、『十勝論』三軸を著せり。頗る作者に称らせ見る。夫れ経論は伝道の妙器、帰郷の直路なり。慈父の教令に云く、「文字道を詮す、一指月を示す」と。文字一指を学得し竟て、亦更に字指の傀儡を忘れて、棚裏の機関きかんを知らば、此れ即ち聖者の撰有る所以ゆえんなり。明者の能く述する所以なり。微言の緒、継継して絶えず。

於戲あ、論主微なかりせば吾門の十勝じしつ孰いずれか之を言わんや。後代な奚ぞ述せんや。大凡おおよそ天の木鐸もくたつと為るは、是れ吾が先生のみ。夫れ大聖は寛弘にして小節に拘こわらず。諸子は庸瑣ようさにして今の論教を以て、非と為して細碎さいさいの間に公の智識を格量す。謂いつべし。蠹ぶを以て海を酌しやくむに、焉いんぞ浅深を測らんと。公は即ち他の不当の沮

(577) 握玩：大切にしながら味わい楽しむこと。

(578) 梯航：手引き、案内のこと。

(579) 壺輿：物事の奥深いところ。

(580) 棚裏の機関：傀儡を操る棚の裏の仕組み。

(581) 木鐸：世人に警鐘を鳴らし教え導く人。

(582) 細碎：細々して煩わしい。

(583) 蠹：ひょうたんを割って作った器。

みを聞くときは、則ち黙して言わず。或は又先ず大息し、後に天
に向て呵呵と笑う。然に学者多く明日に恥慚す。今小子法城を護
らんが為に、不請の友と作りて、高く跋文を製して真乗を恢闡し、
永代に程りて作りし、長冥に炬を示す。

時に貞和屠雍星紀仲呂初八之日。三部大阿闍梨耶実信序す。

【即成】

稽うれば夫れ六八宏誓の憲度、如来授手の軌迹、須臾即詣の速
に、応声感降の妙、天の如くに麗にして且た弥り、地の如くに普
く而も深し。固に末に学び膚に受けたる人の能く詳勘する所に非
ず。

抑論主に生知の才有りて能く其の玄邃を悟る。又た凍いた
る則んば衣を青陽の春天に仮り、喝き則んば冷を玄冬の寒風に
待ち、飢えたる則んば飽くこと淨刹の百味を思い、渴きたる則ん
ば飲むことを八池の徳水に期して、曾て偽り諂わす。

夫れ以れば衆人は利を重んじ、廉士は名を重んじ、賢士は志を

(584) 屠雍…屠維(十干の己)のことか。貞和年間己がくるのは、貞和五年(二三四九)。

(585) 星紀…十二次のひとつ。丑。

(586) 仲呂…旧曆の四月。

(587) 三部…密教の金剛界と胎藏界の両部に蘇悉地法を加えたもの。

(588) 玄邃…奥深いさま。

(589) 喝…「あつさあたり」とも訓ずる。

尚^{たうじ}び、聖人は精を貴ぶ。公の貴ぶ所は是れ二道の学^{まな}なり。彼の四子の貴重^{じこう}する攸^{しこう}と、同日にして之れを語るべからざる者なり。

抑^{おさ}論主^{ろんしゆ}淨公大徳は心をして論を製す。厥^{かた}の為^{ため}壯^{たくま}、和漢の旧典

を披きて、以て善を択びて従い、能を資けて録して本願の精要を弁じ、別教の宗本を明かす。厥^{かた}の文義、深妙玄遠なり。達識洞照するに非ざるよりは、亦た能く弁ずること莫^なかりけん。

小子今深く其の句語を味わうに、正に天漿甘露の如くして自然に淳至なり。決^{くだ}めて世間の済^{ます}に塩梅を以てする者の能く髣髴^{ほうふつ}する所に非ず。然るに近世妄庸^{たぐい}の彙^{くわい}、或いは文理を沮^はんで之れ蔑^{べつじよ}如をし、或いは篇数を増して之れを穢^あ雑す。於^あ戲^あ恐^{おそ}しきかな。噫^あ嘻^あ惜^あしきかな。

夫れ論主と余者と同じく経論を見、俱に釈文に対す。然るに其の解判の正邪、天懸^{てんげん}かなり。是れ則ち眼意利鈍の不同のみ。南^{なん}榮^{えい}越^{えつ}言^{ごん}えること有り。「目と形と、吾れは其の異なりを知らざるなり。而して盲者は自得すること能わず。耳と形と、吾れは其の異なりを知らざるなり。而して聾者は自聞すること能わず。心

(590) 二道：仏教と儒教のこと。
(591) 南榮越：老子の弟子である庚桑楚の門人。

と形と、吾れは其の異なりを知らざるなり。而して狂者は自得すること能わず」と。此の義、今に通じて其の意を得たり。嗚呼あゝ宜むべなるかな、寔まことなるかな。

牟尼薄伽、教網を八萬に設張しかば、苦海の迷類、悉く菩提の彼岸に到り、円公大徳、龍泉を十勝に振揮すれば、曠沢群賊、同じく邪見の高幢を靡なびかす。誠に是れ西方往生の指南、東海東出離の巨筏なる者なり。

然るに貞和巳丑あまの歳とし、清水寺回祿あまの時、此の『論』両本、之れを失す。謂わゆる一本は一両軸、忽せに煨燼わいじんと為る。一軸は速かに塵土に塗まれ竟ぬ。一本は紛失して永く見えず。小子ねんご、苦に其の文を求めんと雖も、之れを得ること能わず。適たまたま一二を得れども、猶し未だ余巻を得ず。然るに同杞あまの林鐘あまの天に其の全部を獲たり。仍て同志をして之れを写し、晨昏、之れを握玩して、以て心を洗い慮りを安じ竟訖ぬ。又た剩あまつぎえ跋文あまつぎを綴りて、巻末に附するのみ。

一乗行者沙門即成、謹んで跋す。

(592) 目之与形不能自得：『莊子』雜篇庚桑楚第二三。

(593) 東海：ここでは西方に對し、此土を指す。

(594) 貞和巳丑歳：「巳丑」は乙丑の誤りで貞和五年（一三四九）にあたる。

(595) 回祿：火災にあうこと。貞和五年二月に清水寺の本堂阿彌陀堂などが焼失している。

(596) 煨燼：灰燼と同義で焼け残りのこと。

(597) 同杞：寛文三年刊本によれば「同じき」と読んでいることから、「杞」は「紀」の誤りか。

(598) 林鐘：陰曆六月。

【隆秀】

蓋し聞く、「夫れ道の為^{ていふたうく}状や、体、百非^{ひゃくひ}を絶し、理、四句^{しご}を超えたり。之れを言えば其の真を失す。之れを知れば其の愚に反る。之れを有としむれば其の性に乖き。之れを無とすれば其の体を傷つくる。故に七弁^{しちべん}も音を憚め、五眼^{ごがん}も照を冥くし、釈迦も室^{むろ}を掩^{おほ}い、浄名^{じやうめい}も口を杜^{ふさ}ぐ。然れども有因縁^{ういんげん}の故に、亦た可得説の一軌^{いつき}無きに非ず。亦た「総持無文字文字顯総持^{そうぢむふもんじげんそうぢ}」の金言有り。是れ則ち根本後得^{こんぽんごとく}の差殊^{さしじゆ}、大智大悲^{だいぢだいひ}の異なるのみ。後得大悲門^{ごとくだいひもん}の中に亦た格外不共^{ごうがいふくう}の妙文^{めうぶん}を出す。所謂^{すゐ}、三部^{さんぶ}の洪典^{かうてん}是れなり。

(599) 百非…多くの否定の意。ここでは悟りへの道が、有でもなく無(空)でもない、非有でもなく非無(空)でもないこと、否定を重ねることでも人間の思慮分別を超えたものであることを示している。

(600) 四句…有と無(空)を以て諸法を分別する四句分別のこと。第一句有門・第二句

(601) 七弁…①捷疾弁②利弁③不尽弁④不可断弁⑤随応弁⑥義弁⑦一切世間最上弁の七種の菩薩の弁舌のこと。

空門・第三句亦有亦空門・第四句非有非空門の前二句を両単といい、後二句を俱是俱非などという。

(602) 五眼：①肉眼②天眼③慧眼④法眼⑤仏眼の五種。認識のはたらきを五種に整理したもの。

(603) 夫道之為…浄名杜口…吉蔵『三論玄義』に「夫道之爲状也。體絶百非。理超四句。言之者失其真。知之者反其愚。有之者乖其性。無之者傷其體。故七辨輟音。五眼冥照。釋迦掩室。浄名杜口」(正蔵四五、二下)とある。

(604) 総持無文…字顯総持：『大般若波羅蜜多經』に「総持無文字文字顯総持」(正蔵七、九五七七)とある。

(605) 根本後得…真如をささるる智慧である根本智(無分別智)と、根本智を得て後に衆生済度のためにはたらく智慧である後得智(分別智)のこと。

(606) 格外不共…格外は並外れて勝れていることであり、不共は仏にのみ具わっていることと共通することがないという意。ともに浄土教が他の教義に超越的な教えであることを示している。

(607) 三部洪典…ここでは『無量寿経』『観経』『阿弥陀経』の浄土三部経を指す。

四依踵(608)を継いで之れを伝持し、諸家跡を同じて之れを闡通す。

古に云く、赤馬の黄駒を恋るや、李南、其れ母子の天愛を解し、白雀の衆鳥に従うや、侯瑾、其れ君子の道の消することを歎く。爰に世、澆季に泊およんで光明の道稍暗く、時、末法に属して吉水の流れ漸く濁る。有識之れを以て流働し、道士所以に大いに悲しむ。

論主の法幢、茲れが為に建て、浄土の十勝、斯れに繇したがて造る。其の著述の為体ていたるや、衆家の短を捨て、諸籍の長ぜるを取り、多く前代未聞の事を挙げ、正しく将来不有の言を吐いて、以て其の源底を極して、以て厥の理窟を尽くす。一源も究極せざれば、則ち諍論止息せず。毫理も窮尽せざれば、則ち玄道露あらわれず。然るに今、源として索もとめざる勿なし。故に群諍忽ちに息みぬ。義として探らざる莫し。故に至理速かに通ず。故を以て斯の論文広く異計を排して以て一路に帰趣せしむ。普く庸愚を諭して以て捷径を顕示す。爰を以て味道の君子、皆な此の論を宗たうとびて以て直道を履むの津涯しんがいと為し、求聖の智人は悉く茲の典に依て以て度門に入る

(608) 四依：人天のよりどころとなる四種の菩薩のこと。四依菩薩の階位の分類には多くの異説がある。

(609) 継踵：継承と同じく、前者の後を引き継ぐの意。

(610) 光明之道：中国長安の光明寺において説かれた善導の浄土教のこと。

(611) 吉水之流：日本京都の吉水において説かれた法然の浄土宗の教えのこと。

(612) 津涯：船を着ける岸や水際のこと。

の枢鍵と為す。古に云く、「百梁の構え興る則んば茅茨の仄陋を鄙しくし、斯の論の絃博なることを覩る則んば偏悟の鄙倍を知る」と。此れは学者十勝の妙道を看て、魯鈍の卑懐を慙ることを云謂うか。

抑 隠士隆秀、夙熏多幸にして英賢の高判に値うことを喜んで、
怒りに弊文を綴て其の文尾に題すと爾。

【一秀】

詳らかにすれば、夫れ浄土十勝論は変礫成金の大術、転毒為薬の秘方なり。且く若し此の論に依りて持念すれば、火輜の輓かきやくくびき 摧くだけて、涼風天花を吹き、阿防壁地あひやぐしじして、日輪、閻室を照らす。夫れ以れば忍界は諸の苦患を具し、安養は但だ衆楽を受け、此土は業障の重軽に随いて三界に墜墮し、彼土は功業の深淺に任せて九蓮に階のほる。楽域と苦邦と、金室と泥沙とに孰いずれ与ぞ、豈に沙苦を抛ちて金楽を取らざらんや。

抑 円公上人は生知の才を具えて、夜月を屋上に追わず。蜚雪

(613) 茅茨：かやといばらで葺いたような粗末な建物のこと。

(614) 仄陋：卑しい身分のこと。

(615) 鄙倍：心卑しくて道理に背くこと。

(616) 百梁之の鄙倍：竜樹『中論』に「百梁之構興。則鄙茅茨之仄陋。觀斯論之宏曠。則知偏悟之鄙倍」(正蔵三〇・一上)とある。

(617) 変礫成金：法照『五会法事讚』に「般舟三昧樂専心念仏見弥陀但使迴心多念仏能令瓦礫變成金」(浄全六・六八六上)とある。

(618) 転毒為薬：龍樹『大智度論』に「譬如大薬師能以毒為薬」(正蔵二五・七五四中)とある。

(619) 火輜の輓：火輜とは火の車、輓とは車の輓(ながえ)の端につけて、牛馬の後頭にかける横木。

(620) 阿防：地獄の獄卒。牛頭で、胴と手は人、脚は牛に似ており、山を抜くほど力が強く、羅刹のように暴悪である。

(621) 壁地：地面に倒れて転げ回ること。「びゃくじ」とも言う。

(622) 忍界：娑婆世界のこと。

を窓中に聚めずといえども、諸宗を通利し、内外に綜慣す。諸芸を一身に備うといえども更に碩鼠の五能に非ず。四海を寸波に収むといえども、亦た文広の譏謙を離れたり。寔に是れ無明長夜の隋珠⁽⁶²⁴⁾、老病生患の甘葉なり。爰に隱を索めず、深に釣らざる庸輩ありて、論文を誹り、論主を侮る。然るに人の辱呵するを被り、或いは冥の照罰に駭⁽⁶²⁵⁾いて、自ら臂^{ひじ}を断じて以て過りを謝し、自ら髪を薙^ひりて以て随任し、手を肉袒^{にくたん}して誅を請い、手に組^{くみひも}を係けて降伏す。罪人一秀、亦た其の一つなり。追悔信伏の余、筋力を励まして以て論文を歎ず。

伝天台宗、兼真言教、厭欣の行者、死刑一秀、故に稽顙⁽⁶²⁶⁾して洛陽河東福成寺に書す。

【隆珍】

吾れ先聖に聞く⁽⁶²⁷⁾。

諸大乘経に浄土に生ずることを勧む。因、二種に通ず。一に定、二には散。定は謂く即身に仏を觀じて彼の西方の依正

(623) 碩鼠之五能：碩鼠とは昆虫のケラのこと。五能とは飛ぶ・登る・潜る・掘る・走ること。いろいろな能力があるが、どれも役に立たないこと。

(624) 隋珠：随色摩尼のことで、摩尼宝珠のこと。

(625) 原文には種「おさない、いとけない」とあるが、意味がとれないため、薙「かりとる」とした。

(626) 肉袒：肩脱ぎして、肉体の一部をあらわすこと。昔中国で降伏や謝罪の意をあらわすためにおこなった。

(627) 稽顙：頭を地面にすりつけるように拝礼すること。手紙文の末尾に書き添えて、相手に対する敬意を表す語。

(628) 吾聞先聖：以下『楽邦文類』（正蔵四七・二一中〜下）。

主伴を想う。二には散善。純実の心を用て西方有りと信じて、一心不乱にして念を弥陀に繋けて、一日七日声声絶えず、念無間なり。『経』に云く「名号を執持して一日七日一心不乱なれば、其の人命終のとき、即ち弥陀仏と諸の聖衆と現じて其の前に在す」と。然るに事に彼の国を想いて、但だ三觀無きを散善と名づくのみ。生ぜん願ずれば咸く極樂に登る。吾祖智者の云く「根に利鈍有り、行に定散有り。觀仏三昧は定なり。余善を修するを説きて以て散と為す。散善は力微にして五逆を滅除すること能わず。此の経には觀を明かすが故に往生を得」と。是に知んぬ。若しは定、若しは散、或いは鈍、或いは利、皆な浄土の因にして咸く無生に趣き、永く退転無しと。

夫れ散称即往の一則は大いに時機を得て、而して利有り。其の散唱直詣の断簡、『浄土十勝論』に具さなり。

於西乾東震の諸聖、月国日域の群英、力を勦せ、志を一にし以て弥陀別願の宗旨を賛輔す。其の書典、山と積もり海と湛う。

(629) 『阿弥陀經』(浄全一・五四)。

(630) 三觀：天台に説かれる空・假・中の三觀のこと。

(631) 伝智顛『觀經疏』(正藏三七・九三中)。

(632) 西乾東震之諸聖：インドから中国に至るまでの聖人のこと。

(633) 月国日域之群英：インドから日本に至るまでの優秀な人々のこと。

(634) 贊輔：贊仰輔助の意。贊仰は聖人の道を探求し徳を仰ぎ慕い、学問・研究に精進すること。輔助は足りないものを補い助けること。

唯ただ此の論文最も首冠たまた為り。聖旨を援引して衆惑を開決す。万年の闇室に日至りて頓に群陰を釈とき、千里の水程に舟具えて自力を勞せず。覺王の後身に非ざれば、是に至ること能わず。抑隆珍おさよとも、西郊法輪寺(635)に於て、斯の文を獲て讀みて所解を示す。信を生ぜざるといふこと無し(636)。

夫れ論主夫子円公大徳は浮図洪教中興の俊雄として真人た為り聖人為り。不器にして量り巨く、高遠にして窺い難し。金言を沙界(637)に布き、木鐸(638)を鉄圍(639)に振う。音を聞きて理を察し、色を見て意を知る。所以に機宜(640)に任せて、或いは理を以て事を奪し、或いは事を以て理を奪す。故を以て言をも失せず、人をも失せず。寓言(641)卮言(642)機(643)に随いて用い、規矩抑揚(644)人に依つて撰す。能く問い能く答えて学者の四失(645)を救う。故に鷹鳩ようきゅう雉雀ちじやくの鸞(646)、一に非ず。

(635) 法輪寺：不明

(636) 贊輔弥陀(637)不生信兮：『浄土十疑論』楊傑序（正藏四七・七七中）を参照して書かれたものとみられる。「然贊輔彌陀教觀者。其書山積。唯天台智者大師。淨

土十疑論最爲首冠援引聖言。開決群惑。萬年闇室。日至而頓有餘光。千里水程舟具。而不勞自力。非法藏後身不能至於是也。傑頃於都下管獲斯文。讀示所知無不生信。」

(637) 沙界：娑婆世界のこと。

(638) 木鐸：木製の鈴。中国では法令を人民に触れて歩く際に用いた。転じて世人に警告を発して教え導く人

(639) 鉄圍：鉄圍山のこと。須弥山を中心に九山八海がこれを取りまくが、その最も外側の鉄でできた山をいう。

(640) 機宜：時期にふさわしいこと。また、それをするのによい機会。

(641) 寓言卮言：寓言・重言・卮言。莊子の『莊子』雑編の中「寓言篇」にある。寓言はいわゆる比喩、重言はいわゆる引用、卮言はいわゆる自由な表現

(642) 規矩抑揚：規矩は考えや行動の基準とするもの。手本、規則のこと。抑揚は音声や音楽の調子の上げ下げや強弱をつけること。

(643) 四失：『礼記』『学記』に学ぶ者に多寡・易・止の失があることを示している。多を失すとは、多くのことに手を広げると、すべて散漫な知識となること。寡の失とは狭い範囲のことをすれば知識は貧弱になること。易の失とは、目先の変化に引かれると何一つ完全な知識は得られないこと。止の失とは、狭い範囲に限定すれば知識は偏狭となること。

又た文辞⁽⁶⁴⁴⁾翫然として称誉⁽⁶⁴⁵⁾頓に上る。其の辞筆⁽⁶⁴⁶⁾弁衆の徳、得てして称し⁽⁶⁴⁷⁾匡⁽⁶⁴⁸⁾き者か。徳星⁽⁶⁴⁹⁾野に見われ⁽⁶⁵⁰⁾九包⁽⁶⁵¹⁾林に遊ぶとは、蓋し此の故なり。但し、儘⁽⁶⁵²⁾背⁽⁶⁵³⁾信⁽⁶⁵⁴⁾合⁽⁶⁵⁵⁾疑⁽⁶⁵⁶⁾の輩⁽⁶⁵⁷⁾を視⁽⁶⁵⁸⁾聴⁽⁶⁵⁹⁾す。此れは是れ大声⁽⁶⁶⁰⁾里⁽⁶⁶¹⁾耳⁽⁶⁶²⁾に入らざるの謂⁽⁶⁶³⁾のみ。

金剛⁽⁶⁶⁴⁾仏子⁽⁶⁶⁵⁾隆⁽⁶⁶⁶⁾珍⁽⁶⁶⁷⁾謹⁽⁶⁶⁸⁾んで書す。

【舜秀】

夫れ以れば本誓⁽⁶⁶⁹⁾の教行は、出離⁽⁶⁷⁰⁾の捷徑⁽⁶⁷¹⁾、依行⁽⁶⁷²⁾するの人は珍台⁽⁶⁷³⁾に上りて高く躍り、帰仰⁽⁶⁷⁴⁾するの輩⁽⁶⁷⁵⁾は宝蓮⁽⁶⁷⁶⁾に坐して化生⁽⁶⁷⁷⁾す。如来⁽⁶⁷⁸⁾、玉光⁽⁶⁷⁹⁾を耀かして常に摂護⁽⁶⁸⁰⁾し、四王⁽⁶⁸¹⁾、龍泉⁽⁶⁸²⁾を揮⁽⁶⁸³⁾いて恒に守衛⁽⁶⁸⁴⁾す。斯の如き等の勝益⁽⁶⁸⁵⁾、衆生⁽⁶⁸⁶⁾冥然⁽⁶⁸⁷⁾として識知⁽⁶⁸⁸⁾せず。所以⁽⁶⁸⁹⁾に論主⁽⁶⁹⁰⁾、此の瞽⁽⁶⁹¹⁾盲⁽⁶⁹²⁾の類⁽⁶⁹³⁾を矜哀⁽⁶⁹⁴⁾して、浄土⁽⁶⁹⁵⁾の十勝⁽⁶⁹⁶⁾を纂⁽⁶⁹⁷⁾めて華夷⁽⁶⁹⁸⁾の七衆⁽⁶⁹⁹⁾に与へて、仏事を施作⁽⁷⁰⁰⁾して誓教⁽⁷⁰¹⁾を洪通⁽⁷⁰²⁾す。

抑⁽⁷⁰³⁾竺土⁽⁷⁰⁴⁾震地⁽⁷⁰⁵⁾の群聖⁽⁷⁰⁶⁾、馬台⁽⁷⁰⁷⁾日域⁽⁷⁰⁸⁾の衆賢⁽⁷⁰⁹⁾等、一尊⁽⁷¹⁰⁾郢匠⁽⁷¹¹⁾の秘術⁽⁷¹²⁾を毘贊⁽⁷¹³⁾し、六合⁽⁷¹⁴⁾下流⁽⁷¹⁵⁾の出要⁽⁷¹⁶⁾を顕示⁽⁷¹⁷⁾すること一に非ず。其の典籍⁽⁷¹⁸⁾山岳⁽⁷¹⁹⁾と積もり、厥⁽⁷²⁰⁾の法語⁽⁷²¹⁾瀛洋⁽⁷²²⁾と湛⁽⁷²³⁾え、其の中に唯だ⁽⁷²⁴⁾円公⁽⁷²⁵⁾尊師⁽⁷²⁶⁾の『浄

(644) 翫：作字。

(645) 徳星：徳高き聖人のことか

(646) 九包：不明

(647) 大声不入里耳：「莊子」「天地」に、すぐれた音楽は俗人の耳には受け入れられないとあり、高尚な議論は俗人に理解されにくいということ。

(648) 瞽盲之類：教えに暗い者の意。

(649) 矜哀：あわれむこと。

(650) 華夷：自国と外国のこと。

(651) 七衆：仏教徒の集団を構成する比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・沙弥・沙弥尼・式叉摩那の七種の人々。

(652) 二尊郢匠：釈迦・弥陀・二尊の意が一致していることを喩えたもの。

(653) 六合：天地四方のこと。

『十勝論』最も首冠^たなり。其の援拠は是れ古聖の金言、其の開疑は乃ち譬縁工巧なり。故を以て万歳の闇室に炬燎^{ごりよう}忽^あに至りて、頓に重陰を除き、千里の水程に般船速やかに具わりて勞倦を愁えず。若し曇摩迦^曇の再来に非ずんば、是こに於て至ること能わず。抑^{そもそも}舜秀^は図らずも西郊清涼寺^清に於て、嘗^{かつ}て此の論を獲て、指を染めて書意を看得し、沈思して点檢子細にして、以て知音に示すに、信敬を致さずと云うこと莫し。之れを八極^八に行かまく欲して謹んで跋^つを為るや。

【凡例】

校訂浄土十勝論凡例

一、論主の著述若干あり。中に就いて『十勝論』は学士の欽慕する所なり。初め刊本無し。転写して之れを伝うる者、殆ど三百四十有余歳なり。故に文字の訛謬無きこと能わざるなり。後に是の『論』を刻む者、応に考拠・校訂を為さず。故に失誤有ることを致す。

(654) 炬燎：かがり火のこと。

(655) 曇摩迦：法蔵菩薩の異名。

(656) 西郊清涼寺：京都市右京区嵯峨にある。

嵯峨釈迦堂の名で知られ、融通念仏の道場としても知られている。

(657) 八極：八方の果て。転じて全世界をいう。

一、寛文癸卯の刊本の版、天明の火災に罹りて燬滅す。先師法洲、再興に思惟すること久し。遂に力を隆円・僧寿の二師に戮せ翻刻すること既に八冊なり。然れども未だ刪補の業を果たさずして、二師、年序を追いて逝きぬ。是に於いて、先師重ねて師兄法道、暨び不肖門に囑して曰く「爾曹ら宜しく覆考・上梓して、以て吾が業を継ぐべし。敢えて諸を忽せにすること勿れ」と。爾来、師兄は二利に暇無く、傍らで著述を事として、劇しきこと頭然を救うが如し。然れども遍く募縁を阜白に謀りて大いに刻資を給す。謂いつべし、勵めたり。予や惟り、孳孳として日に驚駘に策うち、且く蓮社に蔵する所の古本を搜擦して憇いに以て重修す。希わくは覽ん人、人の微かなるを以て、而して論文に異同有るを尤むること莫くんば、幸い孔だしきなり。

(658) 寛文癸卯…寛文三年（一六六三）。

(659) 天明之大火…江戸時代天明八年（一七八八）に京都で起こった大火のこと。天明の

大火は御所や二条城まで焼く程のすさまじい火災であり、寺社も多く焼失している。

(660) 法洲：明和二年（一七六五）—天保一〇年（一八三九）。大日比三師のひとり。法岸の弟子。裏蓮社承誉託阿。

(661) 隆円：宝暦九年（一七五九）—天保五年（一八三四）。託蓮社調誉順阿。

(662) 僧寿：不明
(663) 刪補：文章を削ったり、補ったりして調えること。

(664) 法道：文化元年（一八〇四）—文久三年（一八六三）。大日比三師のひとり。法洲の弟子。徳蓮社元誉信阿。

(665) 門：的門のこと。文化五年（一八〇八）—明治三年（一八八九）。即蓮社得誉忍阿。

(666) 阜白：黒と白のことで、ここでは黒衣の能化と白衣の在家を指す。

(667) 孳孳：つとめて怠らない様子。

(668) 驚駘：驚馬と同じ意味で歩みの遅い馬のこと。転じて、才の劣る者のたとえに用いられる。

(669) 「擦」…作字。

一、今、古本と称するは旭蓮社第十四世灯誉（670）自ら謄写する所の本なり〔蓋し師は泉州佐野上善寺・春木西福寺等の開祖にして、而も名譽時に振る〕。日本と称するは天明灰燼の刊本なり。是の二本に參較して以て今刻を成ず。而して二本並びに誤脱有るは圈点（671）を施し、乃ち其の首はじめに標すに困いを以てす。而して猶お疑うべき者有るを評するに「恐」の字を以てす。

一、援引する所の經論鈔疏等、間脱まは誤有るに至りては現流の本に較べて焉これを補正す。然れども未だ原本を得ざる者は姑しばらく後彦こうげんを俟まちつ。

一、是の論の分卷同じからず。本と三卷なり。古本は十卷と為す。灯誉附して云く「此の論は上中下三卷なり。其上卷は乾坤二冊、中卷は乾坤二冊、下卷は本末二冊にして、全部六卷なり。然るに今之れを書写するや、紙葉巨多にして六卷には成じ難し。之れに依りて論主の影前に於いて而も闕くじを取りて十卷に調い訖りぬ」と。又た

(670) 灯誉…文明四年（一四七二）—永祿二年（一五五九）。重蓮社灯誉良然。知恩院第二十七世。

(671) 圈点…文章の要所を示すために、文字の傍らに打つ丸い点。

後彦…後代のすぐれた士のこと。

(673) (672) 闕…くじのこと。ここでは数多くある紙片を指す。

旧本は十四巻と成す。今刻は之れに倣う。

一、古本の二本は俱に上中下各本の章目の下に第一、第二等と標す。今刻は次第を通貫して之れを標す。亦た内題には上中下を標し、更に低く書して次第を顕す。是れ古意を失わざらしめんが為なり。而も以て今刻の一体と為す。

一、古本は『輔助義』を闕く。今刻は旧本に依りて訂正す。

一、論主の伝記に齟齬あり。今、伝記を抄出し、序跋を並挙し、章目を列次して、之れを首巻と為し、全部十九巻を成す。

時、嘉永五年壬子九月望⁽⁶⁷⁴⁾

平安 大雲院勤息⁽⁶⁷⁵⁾の門、謹みて識す

【章目】

浄土十勝論総章目 今、日本の分巻に倣う

巻の上 開して六巻と為す

巻第一

乾上

(674) 嘉永五年壬子：一八五二年。

(675) 大雲院：現京都市東山区。竜池山真安寺。開山は聖譽貞安。天正一五年（一五八七）建立。

(676) 勤息：善行につとめ、悪を止息するの意。沙門と同義に使用される。

三学無分勝 第一

卷第二

持名最上勝 第二

卷第三

末法利益勝 第三

具結得脱勝 第四

具縛不現勝 第五

具纏不退勝 第六

卷第四

六宗根本勝⁽⁶⁷⁷⁾ 第七

墳籍遶躑勝 第八

該教行益勝 第九

超絶師範勝 第十

自解他宗勝 第十一

精進苦節勝 第十二

頓中頓教勝 第十三

乾中

乾下

坤上

(677) 本文中では「立宗根本勝」となっている。

小聖住報勝 第十四

凡聖住報勝⁽⁶⁷⁸⁾ 第十五

不求世樂勝 第十六

卷第五

不說現益勝 第十七

順次得脫勝 第十八

広長舌相勝 第十九

証誠現益勝⁽⁶⁷⁹⁾ 第二十

不誨現益勝⁽⁶⁸⁰⁾ 第二十一

法滅利物勝 第二十二

三時不代勝 第二十三

執著解脫勝 第二十四

行德遮惡勝 第二十五

一代遍勸勝 第二十六

依經直說勝 第二十七

超世本願勝 第二十八

坤中

(678) 本文中では「凡愚住報勝」となっている。
(679) 本文中では「証誠奇特勝」となっている。
(680) 本文中では「不誨現行勝」となっている。

称名音声勝 第二十九

卷第六

散心往生勝 第三十

墳籍仏説勝 第三十一

他家推称勝 第三十二

羸学褒讃勝⁽⁶⁸¹⁾ 第三十三

积文降魔勝 第三十四

廢立独妙勝 第三十五

三学自然勝 第三十六

持念超経勝 第三十七

攘災招福勝 第三十八

説時説処勝 第三十九

卷之中 開して五卷と為す

卷第七

無解大乘勝 第四十

凡夫長寿勝 第四十一

乾上

(681) 本文中では「兼学褒讃勝」となっている。

尼衆往生勝	第四十二
魔不能浩勝	第四十三
鶴林婦嚮勝	第四十四
仏前重說勝	第四十五
発願叮嚀勝	第四十六
來迎殊絶勝	第四十七
自作他受勝	第四十八

卷第八

護持国家勝	第四十九
影像現仏勝	第五十
本地高妙勝	第五十一
禽魚現行勝	第五十二
遺身解脫勝	第五十三
無夙善生勝	第五十四
二宗精簡勝	第五十五
翻訳重複勝	第五十六

乾中

尊号中王勝 第五十七

疑心往生勝 第五十八

激勸叮嚀勝 第五十九

仏子第一勝 第六十

遺文放光勝 第六十一

取執不捨勝 第六十二

卷第九

乾下

毗盧遮那勝 第六十三

非情說法勝 第六十四

禽獸說法勝 第六十五

不樂歎勸勝 第六十六

冥得護持勝 第六十七

来心(來)往生勝 第六十八

大菩提心勝 第六十九

論主後叙

卷第十

坤上

說法奇絶勝 第七十

受經得弁勝 第七十一

智弁無窮勝 第七十二

聞名不退勝 第七十三

生得六通勝 第七十四

人天寿長勝 第七十五

人天致敬勝 第七十六

卷第十一

生得正定勝 第七十七

具諸相好勝 第七十八

超越階位勝 第七十九

遍至仏国勝 第八十

觀見浄土勝 第八十一

生尊貴家勝 第八十二

具足徳本勝 第八十三

論主勸誠

坤下

卷之下 開して三卷と為す

卷第十二

大悲深重勝 第八十四

判教不共勝 第八十五

聞經当機勝 第八十六

究竟了義勝 第八十七

諸宗根本勝 第八十八

上下該通勝 第八十九

童稚解脫勝 第九十

經中最頂勝 第九十一

喜樂無上勝 第九十二

曼荼竒絶勝 第九十三

卷第十三

章疏簡略勝 第九十四

除三世罪勝 第九十五

言少易行勝 第九十六

乾上

乾下

護持奇特勝 第九十七

念仏追善勝 第九十八

出世本懷勝 第九十九

德高恩重勝 第一百

要法生知勝 第一百一

孝行最上勝 第一百二

講論遑躑勝 第一百三

卷第十四

行人要処勝 第一百四

帝王解脱勝 第一百五

群英依憑勝 第一百六

不諂真言勝 第一百七

尊号除障勝 第一百八

能所同修勝 第一百九

一帰不革勝 第一百十

総計百十勝

坤全

附、蓮華標名勝

『輔助義』四冊

已上